

研究資料

華族写真同人誌『華影』考

—— 明治末期華族写真愛好家の活動と小川一真・黒田清輝との交流を巡って ——

齊藤 洋 一

はじめに

一、暫定的分類

二、同人達

三、変遷

四、発行団体名と活動時期

五、印画評

六、黒田清輝と小川一真の講演

おわりに代えて

はじめに

「はなのかげ（花の影）」は「花の咲いている木の下かげ」を意味する春の季語で、古今和歌集や源氏物語に用例がある。⁽¹⁾この言葉を表紙に「かな」もしくは「漢字」で「はなのかげ」、「華影」と記した写真誌が明治末期に発行されていた。誌名がかなで書かれたものは初期の四冊に限られるので、ここではこの写真誌を『華影』と表記することにする。

同誌は縦十八・五センチ、横二十六・三センチの厚手の洋紙を重ね、右端の二カ所を絹の組み紐で綴じただけの簡素な作りで、大部分は一紙に一枚の写真がコロタイプで印刷されている。各冊は十三〜三十四紙からなり、これまでの調査では二十

五冊に五百六十八点の投稿写真、十二点の参考写真が印刷されている。これだけの数を当時高価だったコロタイプで印刷しながらも、刊行の趣旨や目的などの記載はなく、発行年月日、発行者などの奥付情報もない。写真の全点に撮影者名（もしくは提供者名）が付され、大部分に写真の名称が記載されるものの関係する人以外の閲覧、関与を拒んでいるかのような気配さえ漂う。限られた人の間で回覧されたと想像される謎に満ちた冊子群が『華影』である。

投稿者を調べてみると全員が華族である。最後の將軍徳川慶喜、内閣総理大臣を兼任した三條公美（実実の子）、旧土佐藩主山内容堂の子豊尹などそうそうたる顔ぶれが並ぶが、中心となるのは旧徳川將軍家、旧大名家の人々三十六名である。この写真誌は華族のアマチュア写真愛好家による同人誌という性格が想定される。その他の文字情報は、後述するように各号によって有無はあるが、画題及びその年月、入選情報、印画評、採点（百点満点）などがある。特に、印画評と採点は洋画家黒田清輝、写真家小川一真によるもので、撮影者が専門家ではないものの批評対象写真と共にこれらが掲載されている点は注目される。

本稿では、『華影』とは何かという基礎的検討を通じて、明治末期における華族写真愛好家達の活動の一端を明らかにし、その特質について考えたい。また、黒田清輝、小川一真の掲載写真に対する評価を分析し、そこに反映された彼らの写真観についても触れることにする。

一、暫定的分類

これまで調査を行った『華影』は延べ四十七冊で、重複分を除くと二十五冊である。ここでは現状での暫定的な分類を試みたい。最初の手がかりとなるのは画題である。画題は「明治三十六年二月 絵画・風景」、明治四十年四月 細流」などと記載されるので、その年月を手がかりに各冊を配列可能である。ただし記載が無いものが六冊分あるので、これは別途検討する。次に画題、入選作の選定、印画評の有無を指標にすると「参考A 刊行時期区分」の様になり、I期からV期に分類した。⁽²⁾更に、四種類ある表紙A〜Dも勘案して、暫定的にまとめたのが「表1『華影』暫定分類表」である。以下、この表について説明したい。

右端の項目を上から下へ説明すると、一番上は筆者が設定した「暫定番号」(以下、番号と表記、「区分」は「参考A 刊行時期区分」による「区分」、「画題年代」は画題に記される年月を基にしているが、各号に記される画題の年月が複数ある場合はその最終年月を採用した。例えば番号14では三十八年の四月が梅、五月が人物、六月が花卉のため、画題年代は三十八年六月とした。これは画題に対応する年月を示したものに過ぎないので、『華影』の刊行時期や掲載写真の撮影時期とは必ずしも一致しない。以下、「投稿写真数」、「投稿者数」は記載数字の通り、「平均投稿数」は撮影者一人が平均で何枚の写真を掲載しているのかを示す。「画題」から「採点」までは記載がある場合には○、無い場合は×を記したが、「印画評」にある△は同じ号の中で有無があることを示す。「参考写真数」は岡部長職が提供した西洋絵画の複写写真(総数十点、参考B)と小川一真がスクリーン(フィルター)使用による撮影効果を示した写真二点⁽³⁾である。参考Bの写真は岡部自身が撮影したものではなく、何らかのルートで入手した名画の写真を掲載したものと考える。「印画評頁数」は印画評が記載される頁数「画題類写真」は画題に対応した写真数「画題類外写真」は画題とは異なる写真数を示す。「画題類比率」は全掲載写真の何%が画題に沿った写真なのかを示した。一番下の「記載画題 注記、補足事項等」は記載画題と注記(参考、題外、随意画)は『華影』からの転記、補足事項等(二頁欠落有り、存在すれば三十九年十二月頃刊行か、など)は筆者による補足事項である。

先ほど、これまで二十五冊分しか『華影』を調査していないと述べたが、表1では番号が28までである。これは画題年代が三十六年二月以降は年に四冊のペースで刊行されていること、特に三十八年三月以降では三か月に一号のペースで刊行されていることから番号20、26、27の存在を予測し、三号分の番号を表の通り、あらかじめ設定した。また、番号1〜4には画題がないため、刊行時期の直接的な手がかりは全くないが、同一の表紙(Aタイプ)なので、『華影』全体の中で最も早い時期に刊行された一群と想定した。掲載写真は統一感に欠けるが、各号の冒頭部分には絵画、建築、陶磁器、漆器がまともに掲載される。この一群に続く番号5〜8の画題にそれぞれ絵画、彫刻、陶磁器、漆器が含まれているので、その順序に対応させて番号1〜4を設定した。

これまでの検討をふまえて、表1の内容を概観すると、現在確認されている『華影』は二十五種あり、少なくともあと三種類の『華影』が存在する可能性がある。五百六十八点の投稿写真、十二点の参考写真の計五百八十点の写真が掲載される。番号1〜4の刊行年代は番号5の三十六年二月よりも前で、『華影』の発行ペースが年に四冊であることを勘案すると三十五年頃の刊行と推定したい。最後の番号28にも直接的な手がかりはないが、表1では四十一年十二月頃の刊行ではないかと推定した。I期〜III期は表紙A〜Cに対応するが、IV期は表紙CとDにまたがり、V期の表紙はDである。⁽⁴⁾

掲載写真のおおよその傾向を見ると、画題年代三十七年二月までは掲載数が三十を超えることもあったが、三十八年末からは二十を下回るようになり、それ以降では十二しか掲載されない号もあるなど掲載数が減少している。

二、同人達

四十六名に及ぶ同人の情報をまとめたのが表2である。右端の項目は筆者が整理のために設定した「番号」、「同人名」、「よみ」、「投稿総数」は、その同人が『華影』に対して投稿した写真の総計である。その下の「『華影』暫定番号」と「1」、「2」……などの数字が並んでいる項目は各暫定番号の『華影』に対する同人の投稿数である。例えば、青木信光は暫定番号1の『華影』に対して四枚の投稿を行っていることを示す。各同人の投稿分布を示している。

その下の項目は各同人のプロフィールである。「家爵位」は筆者の造語で、同人が属する家の爵位である。同人により当主であるものと家督を継いでいない者があり、爵位は当主にのみ与えられることから設定した。⁽⁵⁾公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の先頭一文字を記した。「家属性」も筆者の造語である。同人には旧大名家の人が多いので、その所在地と呼称、石高を記した。尚、徳川家の人々は、それぞれの特性に応じた表記とした。また、同人中五名は旧公卿、旧諸侯ではないので個別に表記を行った。⁽⁶⁾その下が生没年、その下の「明治40年当時年齢」は同人達の大まかな年齢構成を示すため記した。

次の「表3 同人属性分類」は同人の家柄と爵位の分布を示すため作成した。同

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	暫定番号
V	?	?	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	?	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	区分
D	D	D	D	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	B	B	B	B	B	B	B	B	A	A	A	A	表紙形式
不明 (41年12月か)	未 発 見	未 発 見	41年 3月	40年 12月	40年 9月	40年 6月	40年 3月	未 発 見	39年 9月	39年 6月	39年 3月	不明 (38年 12月か)	38年 9月	38年 6月	38年 3月	37年 12月	37年 9月	37年 5月	37年 2月	36年 12月	36年 9月	36年 5月	36年 2月	不明 (35年 頃か)	不明 (35年 頃か)	不明 (35年 頃か)	不明 (35年 頃か)	画題年代
12	?	?	16	14	12	17	15	?	19	22	19	19	20	23	27	21	25	26	30	31	30	29	30	25	36	28	22	掲載写真数
8	?	?	8	8	8	11	9	?	13	10	11	13	14	15	15	7	10	10	14	15	14	12	16	12	16	11	14	投稿者数
1.5			2.0	1.8	1.5	1.5	1.7		1.5	2.2	1.7	1.5	1.4	1.5	1.8	3.0	2.5	2.6	2.1	2.1	2.1	2.4	1.9	2.1	2.3	2.5	1.6	平均投稿数
?	?	?	?	○	○	○	○	?	○	○	○	?	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	画題
○	?	?	○	○	○	○	○	?	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	入選
×	?	?	△	○	○	○	○	?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	印画評
×	?	?	○	○	○	○	○	?	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	採点
	?	?						?			2									2	3	3	2					参考写真数
	?	?	2	2	2	3	3	?																				印画評頁数
10			11	13	11	13	15		14	15	15	14	14	15	15	9	25	26	14	31	19	18	30	11	20	18	16	画題類写真
2			5	1	1	4	0		5	7	6	5	6	8	12	12	0	0	16	2	14	14	20	14	16	10	6	画題類外写真
83			69	93	92	76	100		74	68	79	74	70	65	55.6	42.9	100	100	46.7	100	63.3	62.1	100	44	55.6	64.3	72.7	画題類比率(%)
十月分。十一・十二月分の記載有り	存在すれば41年9月頃刊行か	存在すれば41年6月頃刊行か	印画評対象写真の半分は点数のみ記載	十月漁村・十一月煙・十二月山路	七月野菜・八月放題・九月影、題外	四月細流・五月花・六月夜景	一月松・二月池沼・三月車、題外	存在すれば39年12月頃刊行か	七月波濤・八月夕照・九月瀑布、随意画、1頁欠落有	四月山・五月花・六月小舟 随意画	一月春遊・二月冬枯・三月老幼、随意画	七月滑稽・八月船舶・九月海	四月梅・五月人物・六月花卉、随意画	一月冬・二月水・三月古社寺、随意画	十二月画題・雲・音楽	九月画題・納涼・雨後	五月画題・朝霧・夕照	二月画題・雪・枯野 題外	漆器・収獲・武器、参考	陶磁器・水・盆栽、題外、参考	彫刻・建築・花卉、題外、参考	絵画・風景、参考	2頁欠落有り					記載画題 注記 補足事項等

表1 『華影』 暫定分類表

V期	Ⅳ期	Ⅲ期	Ⅱ期	I期	区分
41年12月か	40年3月～ 41年12月	38年3月～ 39年12月	36年2月～ 37年12月	35年頃か	
○	○	○	○	×	画題
×	○	○	×	×	入選
×	○	×	×	×	印画評・採点

参考 A 刊行時期区分

暫定番号	作品名	出品者	年 月	所蔵者タイトル	所蔵者
5-31	西班牙国ムリロー氏筆	岡部長職出品	36 2	ムリーリョ「善き羊飼いととしてのキリスト」 1660 頃	ブラド美術館（マドリッド）
5-32	佛国コーロー氏筆	岡部長職出品	36 2	コロー「石切場」 1872-74	キンバール美術館（アメリカ）
6-30	TH. ROUSSEAU.	岡部長職出品	36 5	ルソー「オワーズ河岸の小作地」 1852	個人蔵
6-31	REMBRANDT VAN RYN.	岡部長職出品	36 5	レンブラント「アルテミジア」 1634	ブラド美術館（マドリッド）
6-32	RCGIER VAN DER WEYDEN.	岡部長職出品	36 5	ロヒール・ファン・デル・ウェイデン「読書する聖マグダラのマリア」 1445 頃	ナショナルギャラリー（ロンドン）
41486	CARAT.	岡部長職出品	36 9	不明	不明
7-32	REMBRANT.	岡部長職出品	36 9	不明	不明（カタログレゾネに該当作なし）
7-33	TIZIANO VECELLI.	岡部長職出品	36 9	ティツィアーノ「Mater Dolorosa」 1555 頃	ブラド美術館（マドリッド）
8-32	A.VAN DYCK.	岡部長職出品	36 12	ダイク「自画像」「サー・エンディミオン・ポーターと画家」 1632-41	ブラド美術館（マドリッド）
8-33	COROT	岡部長職出品	36 12	コロー「アモールの輪舞」	2011 年サザビーズで売却

参考 B 岡部長職出品西洋絵画写真一覧

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
伊達宗陳	新庄直陳	三條公美	酒井忠興	清棲家教	清浦保恒	小笠原長幹	岡部長職	大村徳敏	正親町實正	内田正學	稻葉順通	稻垣太祥	伊集院兼知	井伊直安	井伊直方	安藤直行	有馬頼萬	阿部正桓	淺野養長	青山幸宜	青木信光	同人
むねのぶ	しんじょう	さんじょう	たのおき	さいのり	きよす	おがさわら	ながもと	おおむら	おおぎまら	まさあきら	いなば	いながき	いじゅういん	いおやす	いおかた	いおゆう	いおみつ	いおな	いおな	いおな	いおな	よみ
3	16	11	10	14	4	6	8	12	20	1	9	4	3	27	20	14	1	39	10	4	9	投稿回数
				1										2		1		2		1	4	1
				2												3						2
		1						2						3		2						3
				2			4		2					3		2		2			2	4
		2							2			1		2		2		2		2	3	5
		1		3										3		2		3				6
	1	2							1		1	3										7
	1										1			3		1		3		1		8
	2			2				3			1					1		3				9
			3	2			4											2				10
1	3			2					6	1												11
	3		3					3	4					3								12
	1		4		4			1			1			1	3							13
		2						1	1		2		2		2							14
1		1				2		1			2		1	1	1			1				15
1		2									1			1	2							16
						1		1						2	4			2	1			17
						2			2									2				18
						1		1							1		1	3	1			19
								1						2	2			1				21
															2			3	2			22
															1			2	1			23
	1														1			4	3			24
	1													1				3	1			25
															1			1	1			28
侯	子	公	伯	伯	男	伯	子	子	伯	子	子	子	子	子	子	男	伯	伯	男	子	子	爵位
伊予宇和島10万石	常陸麻生1万石	公家(清華家)469石	播磨姫路15万石	元皇族、臣籍降下	父奎吾はM35年男爵、後内閣総理大臣	豊前小倉15万石	和泉岸和田5.3万石	長州藩士	公家(羽林家)355石	下野小見川1万石	豊後臼杵5万石	近江山上1.3万石	薩摩藩士	越後与板2万石	越後与板2万石	男紀伊田邊3.88万石	伯築後久留米21万石	伯備後福山11万石	男広島浅野家分家	子美濃郡上八幡4.8万石	子播磨麻田1万石	家属性
万延	安政	明治	明治	文久	明治	明治	安政	明治	安政	弘化	明治	安政	明治	嘉永	明治	安政	元治	嘉永	明治	安政	明治	元号
1	3	8	12	2	16	18	1	9	2	4	8	6	3	4	6	5	5	4	5	1	2	生
12	11	5	6	5	11	3	11	4	6	11	10	6	10	2	2	11	6	12	9	11	9	年
16	2	8	6	22	26	2	16	5	7	3	26	11	9	11	28	20	15	29	5	20	20	日
大正	大正	大正	大正	大正	昭和	昭和	大正	大正	大正	明治	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	明治	昭和	大正	昭和	昭和	昭和	元号
12	2	3	8	12	3	10	14	12	12	43	27	7	32	10	11	41	2	3	16	5	24	年
2	4	1	9	7	10	2	12	3	6	7	7	1	2	8	2	3	3	8	3	2	12	月
7	15	30	22	13	1	9	27	23	26	21	5	27	19	25	3	6	21	19	5	6	28	日
46	51	32	28	45	24	22	53	31	52	60	32	48	37	56	34	49	43	56	35	53	38	40年当時年齢

46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
山内豊尹	萬里小路通	松平頼安	松平康民	松平康莊	松平乗長	松平直之	牧野康強	牧野忠篤	本莊宗義	堀河護麿	堀田正亨	細川利文	二條基弘	鍋島直映	鍋島直柔	中川久仁	鳥尾光	戸田忠雄	徳川慶喜	徳川達道	徳川厚	徳川昭武	土井利興
やまのうちに とよただ	ままでのこうじ みちふ	まつだいら よりやす	まつだいら やすたみ	まつだいら やすたか	まつだいら のりなが	まつだいら なおゆき	まさの やすたけ	ただあつ	まさの むねよ	ほりかわ もりまろ	ほつた まさみち	ほしかわ としあや	もとひろ にじよう	なべしま なおみつ	なべしま なおとう	ひさとう なかがわ	ひかる とりお	ただお	とくがわ よしのぶ	さとみち とくがわ	あつし とくがわ	あきたけ とくがわ	としとも とくがわ
2	1	2	18	23	49	33	13	12	11	7	6	18	1	1	2	1	17	27	9	22	13	8	27
			2	1		2	1	1					1				1						2
			3	3		2	1	3				2					3	3					3
			2	3		2		2				1					3	3					1
			3	2		2	3	2				2					1	2					2
			3	2	1	1		1										2	3				1
	1			1	3	1	4											4					3
			3	3	3	2	1				3						3	2	2				
2			2		3			3			3				1			2	3				2
				3	3	2	1					2			1								3
				4	3	2	1					3						2					3
						2											3	2					2
					2							2											
		1			4	1			2	1		3				1					2		1
				1	3		1		2	2		1								1	1		1
					3				1	1										1	3		
		1			2				2	1								2	1	2			1
					3				1											2	1		1
					4													1		4	2	1	1
					3					1							1	1		2	2	1	
					3							1		1						3		2	
					1	1						1					1	1		2	1	1	
					2				1								1			2		2	
					2				1	1										1			
					2	6			1											1			
					1	5														1	1	1	
子 高知山内家分家	伯 公家（名家390石）	子 常陸宍戸1万石	子 美作津山10万石	侯 越前福井32万石	子 美濃岩村3万石	伯 上野前橋17万石	子 信濃小諸1.5万石	子 越後長岡7.4万石	子 丹後宮津7万石	子 公家（羽林家180石）	子 近江宮川1.3万石	子 肥後高瀬3.5万石	公 公家（撰家）1708石	侯 肥前佐賀35.7万石	子 肥前蓮池5.26万石余	伯 豊後岡7万440石余	子 長州藩士	子 下野足利1.1万石	公 徳川宗家、同宗家分家	伯 徳川宗家（一橋）	男 徳川宗家分家	侯 徳川宗家（清水）、 水戸徳川家35万石	子 下総古河8万石
慶応	嘉永	安政	文久	慶応	明治	文久	明治	明治	慶応	明治	明治	慶応	安政	明治	安政	明治	明治	明治	天保	明治	明治	嘉永	嘉永
2	1	3	1	3	1	1	11	3	3	6	1	1	6	5	5	4	9	4	8	5	7	6	4
10	5	1	8	2	10	7	4	10	2	8	9	7	10	7	10	5	10	7	9	11	2	9	6
12	27	10	26	6	11	27	21	10	9	13	26	26	25	17	7	20	4	6	29	19	21	24	28
大正	昭和	昭和	大正	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	大正	大正	昭和	昭和	昭和	昭和	明治	昭和	明治	昭和	大正	昭和	昭和	明治	昭和
1	7	15	10	5	3	7	4?	10	4	15	16	19	3	18	43	10	44	12	2	19	5	43	4
12	3	2	3	11	1	4		4	4	8	12	3	4	12	2	7	6	9	11	12	6	7	1
30	4	7	3	17	12	11		11	9	24	27	10	4	10	7	14	1	3	22	29	12	3	2
41	59	51	46	40	39	45	29	37	40	34	39	42	48	35	49	36	31	36	70	35	33	54	56

表2 『華影』 同人一覧

人中の徳川姓の人物は全て旧將軍家に連なる人たちである。同家は諸侯の主君であったので別に項目を設けた。⁽⁷⁾ 同人の爵位を見ると、子爵が二十五名と過半数を超え、次いで伯爵が十名、侯爵、男爵が各四名、公爵三名である。明治四十年当時、十五人しかいなかった公爵が三名含まれているのは注目される。また、属性欄を見ると、旧大名以上の家柄であった同人が三十五名と約七十八%を占める。同人は旧大名家の人々を中心に旧公卿・公家の人と臣籍降下した旧皇族、それに新華族(藩士、その他)から構成されていた。

二、変遷

次に、表1で行ったⅠ期からⅤ期までの区分に従って、『華影』の変遷について述べてい。

Ⅰ期

表紙にかなで「はなのかけ」とある四冊が該当する。漢字表記の「華影」の読みはかな表記の通りではなかったかと推測する。この期はもともと文字情報が少ない。一号は絵画十七点(総数二十二点中、以下数字のみ記載)、二号は彫刻を中心とする立体造形物十七点(二十八)、三号は陶磁器十八点(三十六)、四号は漆器十一・点(二十五)と一応主たる対象物を決めているようではあるが風景写真も多く含まれ、統一感に欠ける。明示されていない大まかなテーマは設定したものの参加者が思い思いの写真を寄せることを許容しているようである。

特定の理念、活動の方向性を誌面から読みとめることは難しいが、自ら撮影、現像、

各属性計	男爵	子爵	伯爵	侯爵	公爵	
1			1			旧皇族
5		1	2		2	公卿・公家
4	1		1	1	1	徳川家
32	1	21	6	3		諸侯(大名)
3		3				藩士
1	2					その他
46	4	25	10	4	3	各爵位計

表3 同人属性分類

焼き付けを行い、印画紙に画像を見たときの素朴な喜びは伝わってくる。限られたメンバーでそれを共有しているのがこの時期である。

Ⅱ期

五号・十二号には画題のみがあるのでこれをⅡ期に分類した。平均投稿数は二十七八。Ⅰ期では活動の方向性が明確ではないので画題を設定し、各作品の比較、相互批評、情報交換を行おうとした意図がうかがえる。画題は「明治三十六年二月絵画風景」などと記されるので、年代の手がかりとなる。刊行時期は少なくとも画題に記載がある年月以降だろう。また、この期に先述した岡部長職が提供した西洋絵画の複写十点が掲載される。ただし、意図については何も記載がない。撮影の参考にするため、当時まだ貴重な情報であった西洋絵画の画像を同人に紹介したということだろうか。⁽⁸⁾

Ⅲ期

十三号・十九号の七冊を想定した。二十号は未発見のためⅢ期もしくは四期の可能性があり、今のところ未詳としか記述できない。また、十六号は画題を記載した頁(通常、一番先頭にある薄手の紙に印刷される)が失われているため画題と年月が判らない。ただ、投稿写真の脇、通常画題もしくは題名が記載される部分に「一等」「二等」などの記載があるため、画題は存在したと判断した。年月を確認できないため未発見と想定した二十号は十六号である可能性もある(この場合は十六号が未発見となる)。表紙のタイプはいずれもC、平均投稿写真数は二十一・三である。Ⅲ期から月毎の画題が設定されている。この期で注目されるのは入選作の選定である。優劣をつけるようになったことを意味する。Ⅰ期の思い思いの写真を投稿して楽しむという性格が競い合う場へと変化したのである。入選作の選定者は不明であるが、十七号に「小川一真氏ノ試験セルスクリーン有無」と説明がある写真が掲載され、この時期に小川一真が『華影』と関係していたことが判る。小川は選定者の候補の一人である。

IV期

二十一号―二十五号をこの期にしたが、先述したように二十号がIV期である可能性も排除できず、未発見の二十六、二十七号もこの期のものである可能性もある。表紙タイプはCとDにまたがる。平均投稿数は十四・三となり、I期と較べると半減している。この期の最大の特徴は黒田清輝と小川一真が採点者、評者に招かれ、各百点の持ち点で採点し、両者の合計点で入選作を選定している点である。さらに、二十五号の一部を除き、各作品の印画評も掲載している。アマチュア作品とは言え、印刷された写真に対する彼らの批評が聞けることは貴重である。印画評には彼らの写真に対する基本的な着眼点、分析手法、価値観が反映されていることが予想されるからである。これまで最小限と言って良いほど文字情報が少なかった『華影』がにわかに饒舌となるのがこの期である。入選作選定者が明らかにになり、選定理由も明快になる。印画評に対する分析は五節で行うことにしたい。

V期

二十八号だけをV期に分類した。印画評、採点の有無を分類指標に採用すると、この号にはその両者がなく、入選作の選定のみとなる。これはⅢ期と同等だが表紙型式がDなのでⅢ期（表紙型式はC）ではありえない。画題の年月は月のみ（十―十二月）の記載なので四十一年というのは推定に過ぎないが、投稿数が号を重ねる毎に減少し、この号では十二と最小となっているので四十二年以降の年代を想像するのが難しい。

四、発行団体名と活動時期

これまで『華影』の種類、同人、変遷について、『華影』自体に記載される情報を基に記述してきたが、ここでは同人であった徳川慶喜の邸宅での出来事を記した「徳川慶喜邸日誌」（以後、「日誌」）、慶喜の弟で同じく『華影』の同人であった徳川昭武の撮影記録「カビネ型ゴタク撮影扣」（以下、「撮影扣」、以上、松戸市戸定歴史館所蔵）、東京文化財研究所に保管されている黒田清輝宛書簡から作成した表4を参照しながら会の名称、合併、画題記載の年月と『華影』の刊行時期、会の活動時期

などについて考察を進めたい。（一）内は筆者の注記である。

A 会の名称「徳川慶喜邸日誌」から

明治三十六年一月十九日、徳川慶喜は、「康民様」（津山松平家、慶喜八女浪子の夫、斉の兄）の紹介により、牧野忠篤と自邸で会い、写真原板五枚を渡した。四月二十五日、八月二十四日には「華影会」から葉書が届き、九月十五日には「華影会幹事戸田忠雄」へ「御写真種板（ガラス乾板だろう）差出相成」とある。十一月九日にも戸田忠雄へ「第四回華影会」のために種板二枚を差し出している。牧野、戸田は共に表2から華影の同人であることが判っている。最初に牧野が徳川慶喜の親戚のつてを頼って接触していることがわかる。種板五枚を持ち帰っているのが慶喜が「華影会」に参加する約束を取り付けたのだろう。その後、戸田は二度ほど種板を借用している。『華影』という誌名を会名に含む「華影会」は同誌の刊行団体と考えて良いだろう。十一月九日に「第四回華影会」の打ち合わせをしているので、この時までに華影会の会合は三回しか開かれていなかったことが判る。会発足後それほど時が経っていなかったと想像される。表1と対照すると、三十六年二月に画題が設定されてからこの時までに刊行された『華影』は五―七号の三冊と推定できる。発足間もない会で画題を決めるには会合を持つ必要がある。第一回から第三回の華影会は五―七号の各『華影』に対応している可能性を視野に入れておいてよいだろう。五号より前の『華影』、つまりI期の『華影』は統一感に欠けるが、これは正式もしくは本格的な会発足以前の試行的な刊行であるためかもしれない。

先述の通り、慶喜は三十六年に三回種板を華影会に差し出している。同時期に刊行された五号、七号、八号に掲載された計八枚がその種板に対応すると考えられる。一月に五枚、十一月が二枚なので枚数が記載されない九月は一枚だろう。この年の十二月二日、牧野が来邸し、「華影会大会」の会場について相談し、同月十七日芝公園内にあった「紅葉館」で行われた大会に慶喜は参加している。慶喜は現在までの調査で総計九枚の写真を投稿しているが、その内の八枚が三十六年に集中する。参加当初は会の運営の相談もうけていたが、その後、彼の会での活動は下火になる感がある。その中で三十八年二月八日の記事は注目される。

年	月	日	史料及び記事
36	1	19	「一兼而康民様御紹介ニ而牧野忠篤殿参邸御逢御写真種板五枚御持帰り御土産 越の雪 老折」
	4	25	「一華影会より端書差出」
	8	24	「一華影会より御直宛端書御至来」
	9	15	「一華影会幹事戸田忠雄殿江御写真種版御差出相成」
	11	9	「一戸田忠雄殿江第四回華影会江御差出之写真御種版式枚差出ス」
	12	2	「一子爵牧野忠篤殿参邸華影会大会々場之件ニ付御打合有之」
	12	12	「一來ル十七日紅葉館ニ而華影会総会へ御出」
	12	17	「一九時御出門御幌馬車ニテ林町御邸江被為入夫より紅葉館華影会江御参会午後八時二十分御帰邸」
37	12	18	「一華影会幹事江書面出」
	1	9	「一華影会幹事より御直（書脱カママ）御至来」
	5	4	「一華影会より端書御至来」
	5	29	「一華影会より写真若干廻る」
	6	7	「一華影会戸田忠雄殿より端書御至来」
	8	25	「一華影会より端書御至来」
	11	27	「一華影会より写真帖御到来」
38	12	6	「一華影会幹事戸田忠雄殿より写真原版之件端書御到来」
	1	28	「一華影会より端書御至来」
	2	8	「一旧探勝会旧華影会両幹事ヨリ両会合併ニ依り來ル十三日午後四時芝公園内紅葉館ニ於テ総会江招請之処御差支有之御断端書御差出」
	2	19	「一華影会より端書御至来」
	3	4	「一華光会端書御至来」
	4	25	「一華影会江一橋様よりの幸便ニ而御写真御差出」
	4	29	「一華光会より端書御至来。6/12、7/14、12/28にも同内容の記載あり」
39	5	8	「一華光会より端書御至来。3/18、4/10、5/20、6/10、8/2、9/16にも同内容の記載あり」
	2	18	「一華光会より端書御至来。3/18、4/10、5/20、6/10、8/2、9/16にも同内容の記載あり」
	5	20	徳川昭武、「小合沼釣魚（蛇籠）」を撮影。『華影』明治39年6月画題「小舟」に四等入選（B）
	5	24	「一華光会より御写真廻ル」
	9	3	徳川昭武、「江戸川の夕照」を撮影。『華影』明治39年8月画題「夕照」に四等入選（C）
40	1	9	「一華影会より端書御至来」
	1	24	徳川昭武、「本郷安竜庵の松（2）」を撮影。『華影』明治40年1月画題「松」に一等入選（D）
	2	6	「一華光会ヨリ本年ノ課題申来」
	3	17	「一華影会より写真帖御送り付」
	11	10	「一華光会より書面御至来」
	12	13	「一來ル二十一日華光会へ御出席之件細川殿宛御断」

41	2	3	「一華光会端書御至来」。3/15、5/19、7/2にも同内容の記載あり
	7	11	「一華光会幹事へ当テ御都合上御退会之旨御通知ニ相成」
	10	25	「一華光会より番組御至来」
	12	25	松平乗長、黒田清輝に華光会出席と「其前拙宅へ御光来」へのお礼、その際の欠礼へのお詫びを述べ、「用暇之折御来遊願度候」との葉書を出す（E）
42	12	11	「一華光会幹事より写真見本送附」
43	12	12	「一昨日之華光会写真帖御断書出ス」
	1	11	松平乗長、黒田清輝に對して、1月16日に松平乗長邸で開かれる「日本写真会」で例年通り、「品評」をして欲しいと依頼（F）
	2	5	華光会「韓国集」発行。この時の同会代表者は戸田忠雄（G）
	2	7	「華光会重任幹事 戸田忠雄 井伊直方 松平直之」、黒田清輝に對して「來ル二月十二日午後一時より華族會館ニ於テ華光会壹貳月分例会開會」のため「御來車」を依頼（H）
	12	16	「華光会幹事 松平直之 井伊直方 戸田忠雄」、黒田清輝に對して「華族會館」で「本會總會來ル二十五日開會仕候」ため、「御來車」の上「出品写真ニ對し御投票」を依頼（I）
44	9	19	黒田、全国写真大会で「画家の見たる写真について」講演（会場・東京美術学校写真部校舎階上講堂）（J）
	12	18	「華光会幹事 松平直之 井伊直方 戸田忠雄」、黒田清輝に對して「華光会大會來ル廿四日午後一時ヨリ華族會館ニ於テ相關キ出品印画ニ對し御投票并御批評」を依頼（K）

- （A）年表記載事項は*B・Jを除き「徳川慶喜邸日誌」（松戸市戸定歴史館所蔵）からの引用である。引用文は「」で括った。
- （B）徳川昭武「カビネ型ゴタク撮影扣」（松戸市戸定歴史館所蔵）の年表記載日の記述による。なお、欄外備考に「景一、No31、華光当選〇」とある。
- （C）*B前掲史料年表記載日の条。同日欄外備考に「景一、No35、華光当選」とある。
- （D）*B前掲史料年表記載日の条。欄外備考に「景一、No48、華光当選、〇」とある。
- （E）松平乗長書簡（黒田清輝宛）。東京文化財研究所保管（File No21—20）。
- （F）松平乗長書簡（黒田清輝宛）。東京文化財研究所保管（File No25—51）。尚、書簡に記される日付は一月十一日だが、封筒に押印されるスタンプは一月十日である。
- （G）「韓国集」は日本カメラ博物館蔵。表紙に表題の他に「華光會」とあり、奥付には「編集兼発行人 華光会代表者 戸田忠雄 東京市本郷区彌生町三番地」、「印刷者 角田吉三郎 東京市日本橋區久松町三十七番地」、「印刷所 東京製版所 東京市日本橋區久松町三十七番地」とある。
- （H）「華光会重任幹事 戸田忠雄 井伊直方 松平直之」書簡（黒田清輝宛、東京文化財研究所保管（File No25—104）
- （I）「華光会幹事 松平直之、井伊直方、戸田忠雄」書簡（黒田清輝宛）。東京文化財研究所保管（File No24—011）
- （J）同講演の写真新報記者による筆記は「写真新報」（写真新報社、明治四十四年十月一日発行）に掲載
- （K）「華光会幹事 松平直之 井伊直方 戸田忠雄」書簡（黒田清輝宛）。東京文化財研究所所蔵黒田清輝宛書簡（File No20—44）

表4 『華影』関係年譜および史料

旧探勝会旧華影会両幹事ヨリ両会合併ニ依リ、来ル十三日午後四時芝公園内紅葉館ニ於テ総会江招請之處、御差支有之、御断端書御差出（説点筆者）

旧探勝会と旧華影会の両会が合併し、二月十三日に紅葉館で開催される総会に招待されたが、出席を断ったというのである。合併しているということは、旧探勝会も写真愛好家の会だろう。つまり、少なくとも華族集団の中に二つの写真愛好グループがあり、両者が合併したのである。では、その会は何と言う会になったのだろうか。三月四日の記事には「華光会葉書御至来」とあり、その後「華影会」の名前も現れるものの「華光会」という表記が増えていく。「華影会」は合併後「華光会」となり、日誌には旧称である「華影会」も併用されたと考えるのが妥当だろう。

日誌には三十七年十一月二十七日、四十年三月十七日に華影会から「写真帖」が届けられたとある。この写真帖とは「華影」だろう。徳川慶喜家の蔵書は静岡市清水中央図書館に「徳川文庫」⁽¹⁰⁾として伝わる。その中に『華影』十四冊が含まれる。慶喜旧蔵と考えて良い。記事記載の「写真帖」はこの中にあるかもしれない。⁽¹¹⁾表4から、華影会（華光会）が定期的に連絡（主に葉書である）をしていたこと、明治三十六年に華影会幹事から請われて活動に参加したこと、三十八年の投稿を最後に具体的な活動が見られなくなったこと、四十一年七月十一日、「御都合上御退会之旨通知」、つまり退会をしたことがわかる。

B 画題記載の年月と刊行時期——「撮影扣」から

表1によると、徳川昭武は十八号〜二十三号に合計八点の投稿を行っている。これは概ね三十八年六月から四十年九月に相当する時期である。彼は二十六年四月に少なくとも二枚の撮影を行っているが、本格的に撮影を開始したのは三十六年からである。⁽¹²⁾三十九年一月からは「撮影扣」を付け始めている。写真の名称、使用乾板、整理記号と番号、⁽¹³⁾撮影年月日、時刻、天気、距離、絞り、シャッター速度、結果、備考などが記される。『華影』で慶喜の活動が低調になる時期に、弟昭武は投稿、入選を目指して技術の向上を図っていたのだろう。その成果もあってか、投稿作は全て入選している。「撮影扣」による情報を表4の三十九年五月二十日、九月三日、

四十年一月二十四日にまとめた。これによると、三十九年八月の画題「夕照」に対応する写真を同年九月三日に撮影していることがわかる。八月の画題の作品を九月に撮影しているのである。「夕照」が掲載されたのは十九号（掲載画題は三十九年七月（九月）なので、九月の画題に対応する写真まではこの号で受け付けられたはずである。彼はその締め切りを睨んで撮影していたのだろう。その他の二例も画題の月の直前または当月に撮影している。撮影された写真は、印画紙への焼き付け、送付、会の事務局での取りまとめ、入選作決定、印刷、配布という過程を経なければならぬ。『華影』の刊行は画題に記された年月よりも相当程度後になったと考えられる。

C 『華影』以後の活動と刊行物

四十二年十二月十二日の「日誌」に華光会を退会していた慶喜のもとへ「写真見本」が届き、翌十三日に「華光会写真帖」への「御断書」を出したとある。三節で存在を確認した最後の『華影』は明治四十一年十二月頃の可能性が高いと述べたが、この「写真帖」が『華影』ではないとは断言できない。これについてはまた後に触れたいが、この時点で華光会が存続していたことが判明する。

一方、東京文化財研究所に保管されている黒田清輝宛書簡中に、華光会同人が差出人となっている書簡が存在する。四十三年二月七日付書簡は「華光会重任幹事」の肩書で戸田忠雄、井伊直方、松平直之が、同年十二月十六日と四十四年十二月十八日のそれは「華光会幹事」の肩書で同じ三名が差出人となっている（表4参照）。三通は黒田に対し、華光会の「例会」、「総会」、「大会」への出席、「御投票」、「御批評」を依頼している。会場はいずれも華族会館である。これから華光会は四十四年十二月まで定期的な会合を開き、黒田に投票、批評を依頼するという活動を続けていたことが判明する。

その他の華光会の活動を伝えるものに二冊の刊行物『富岳集』と『韓国集』⁽¹⁴⁾がある。両集の表紙には誌名の他に「華光会」とあり、発行団体名を明らかにしている。また、『韓国集』の巻末には奥付もある。そこから、『韓国集』は明治四十三年二月五日発行、「編集兼発行人 華光会代表人 戸田忠雄 東京市本郷区弥生町三番地」、印刷者は角田吉三郎、印刷所は東京製版所であることが判る。この時点で、戸田は華光会代

表を名乗っている。住所は彼の住まいのそれなので、華光会はこの時点では独立した事務所を持たず、同人（この場合は戸田）が自宅で会務を行っていたと考えられる。先に触れた「華光会写真帖」はこの『富岳集』である可能性がある。

表紙への発行者名の記載や奥付の存在は『華影』とは対照的である。情報開示への考え方が変化しているのである。両集へ投稿した同人は、延べ十名で、一点しか投稿していない三名を除くと、七名で総計六十九点を投稿している。一名当たり平均九、八点になる。『華影』第四期と較べると投稿者数は減少気味だが、一人当たりの投稿数は増加している。また、この両集は富士山、韓国という大きな共通テーマを設けるだけで、コンテスト形式をとっていない。参加しやすい形を模索しながら、少数の熱心な同人が活動を続けていた様子がうかがえる。この様に考えると、『華影』を刊行しながら性格の異なる写真集を刊行するというのは考えにくく、『華影』休刊後、華光会は『華影』とは性格が変わった『富岳集』、『韓国集』を刊行していたのである。一方、例会、総会、大会などの会合は続け、そこでは『華影』に見られた黒田による投票（順位付けもしくは採点と思われる）、批評が行われていたのだろう。

五、印画評

これまで、『華影』の基本情報を検討してきたが、この写真誌中で最も注目すべきは二十一〜二十五号に掲載された印画評だろう。印刷された写真に対する黒田清輝、小川一真の批評が言葉で掲載されているからである。黒田は三十九作品に対して総計約二千九百文字、小川は五十二作品に対して約五千二百文字の批評を行い、それぞれが持ち点百点で採点を行っている（採点のみの場合もある）。具体的な画像に対する彼らの着眼点、分析手法、価値観、評価をうかがい知ることができる。

最初に全体を概観しておきたい。印画評は巻末に文字だけの頁を設けて掲載される。例えば二十一号の例では「明治四十年一月例会当選印画評」とあり、「第一等（合計百七十九点）徳川昭武君」と記した次に黒田、小川の順で印画評と点数が記載される。第五等まで同様に続く。二十一号には二月、三月の例会分と合わせて計三か月分の印画評が載せられる。これから華光会の例会で述べられた印画に対する批評

を文章化したのが印画評と考えられる。時に、黒田、小川のどちらかが欠席した時には、出席した選定者のみの点数で入選作が選ばれる。なお、二十五号の二月、三月の合同例会では入選結果、点数のみで印画評を掲載していない。印画評と対応する写真は七四〜九四頁に掲載した。各作品の最初の数字は『華影』暫定番号、ハイフンの次の数字はその号の何番目に掲載されているかを示す番号、年月は画題に対応している。印画評を分析するために作成したのが表5である。「印画評数」と「採点数」の数字が異なっているのは、先述の様に採点のみの場合があるからである。「両者合計点範囲」は二人の合計点の最低点と最高点。「黒田点—小川点」は黒田から小川の採点を減じた最大、最小値である。プラスは黒田が、マイナスは小川が高い点数をつけたことを示す。相違点比率は異なった点数をつけた比率であるが、逆に百点満点の範囲で十五％は採点が一致していることも示している。その下の「趣味（画趣）」以下の項目は、項目の言葉が使われる印画評を全体の印画評の数で割った比率である。印画評中、趣味と画趣はほぼ同じ意味で使われると解釈し、一つの項目にまとめた。「趣味（画趣）」と「面白味」は両者が評価の総合的な指標として使っている抽象概念である。「図様」は主要モチーフの配置や選択、「位置」は撮影場所や全体の画面構成、「遠近」は遠、中、近景の調和、「光線」は光の当たり方だが、風景写真ではそれをどの様に選択したか、撮影に生かしたかという点も評価に影響している。これまでの項目は多分に絵画と共通する要素でもあるが、「濃淡」以下は写真印画紙特有の項目である。「濃淡」は印画紙の階調及びコントラスト、「原板」は写真原板（ガラス製の乾板だろう）の仕上げ方、状態、最後の「印画」は印画紙の仕上がり状態である。ここで現代ではほぼ使われなくなっている「写度」という言葉が小川によって使われており、その割合は三十四％、つまり全体の三分の一になる。写度とは一体何だろうか。

25—1、画題「松」で第五等に入選した井伊直安の作品に対して小川は「（前略）原板ノ濃淡少キガ故ニ画ニ於テ黑白ナシ、コノ画、原板ノ写度過ギタル為メ濃淡ヲ失ヒ、且ツ焼付ニ於テモ過度ノ如ク思ハル」と八十点をつけている。「原板ノ写度」が過度であるため濃淡を失っているとしている。濃淡が失われた欠点を補うため、井伊は印画紙の焼き付けの際にそれを補正しようとしたがそれも「過度ノ如ク思ハ

小川	黒田	
52	39	印画評数
58	45	採点数
100	95	最高点
53	40	最低点
83.2	74.4	平均点
98～188	両者合計点範囲	
38～-25	黒田点—小川点	
85%	相違点比率	
37%	36%	趣味（画趣）
47%	38%	面白味
54%	46%	位置
23%	10%	図様
27%	21%	遠近
42%	31%	光線
57%	26%	濃淡
48%	8%	印画
34%	0%	写度

表5 印画評分析表

ル」と評されている。写度とは原板の状態に係る指標らしい。明治四十二年一月一日に本店小西六右衛門によって刊行された『写真器械用品目録』には「写度計」が掲載されている。図版に添えられた説明に「バルトン氏の考案に係り簡易なる露出時間の測量計なり」とある。「写度」とは「露出時間」だと判る。先ほどの「原板ノ写度過ギタル……」とは原版が露出オーバーになったため、焼き付けを工夫したものの濃淡に乏しい印画となったことを述べていたのである。

次に、具体的な作品と印画評、採点を見て行きたい。表6では黒田、小川の両者が共に印画評を述べ、採点した作品を合計点が高い順に並べた。最高点は百八十八、最低は九十八である⁽¹⁵⁾。次に、図版及び印画評を参照しながら、黒田、小川の評価を見てみたい。

A 両者の合計が最高点の例 八九―頁24―9 阿部正桓撮影

画題は「山路」。黒田九十八点、小川九十点をつける。山林中、画面中央から左上に登る小路が写る。黒田、小川共、「濃淡」への評価を行い、左端の樹木の「位置」に言及する。「濃淡」では黒田は「能ク整ヒテ宜シ」としているが、小川は光線の取り方により影が少なくなり「濃淡ニ乏シ」と正反対の評価を行い「印画ノ焼度」が不足しているので「白色ナク」と具体的な欠点を指摘し、この様な原板を適正濃度に仕上げるための現像、焼き付けへの技術的アドバイスをを行っている。「位置」は両者とも基本的に良いとしているが、両者共に、左端の樹木が幹の半分で切れていることを欠点として指摘し、黒田は絵画の場合では木製の額と左端の樹木との区別が付きにくいと画家らしい指摘を行い、小川は樹幹の全部を写すか全く写さない方がよいと述べる。印画紙に焼き付けられた画像そのものを分析するのは両者共通

順位	暫定番号	小番	画題	年	月	順位	作者	黒田点	小川点	合計点
1	24	9	山路	40	12	第一等	阿部正桓	98	90	188
2	23	1	野菜	40	9	第一等	徳川達道	95	90	185
2	24	6	煙	40	12	第一等	徳川達道	95	90	185
4	21	12	車	40	3	第二等	細川利文	98	85	183
5	22	11	車	40	3	第一等	松平乗長	90	90	180
5	22	1	細流	40	6	第一等	徳川厚	90	90	180
5	22	4	花	40	6	第一等	徳川昭武	90	90	180
8	21	1	松	40	3	第一等	松平乗長	87	90	177
9	25	6	不明	40	3	第二等	松平乗長	90	85	175
10	24	10	山路	40	12	第二等	松平乗長	90	85	175
10	21	3	松	40	3	第二等	井伊直方	85	85	170
12	25	7	不明	41	3	第二等	松平直之	90	80	170
14	24	11	山路	40	12	第三等	阿部正桓	88	80	168
15	21	4	松	40	3	第四等	徳川達道	68	95	163
15	24	12	煙	40	12	第二等	松平乗長	93	70	163
17	24	12	山路	40	3	第四等	浅野養長	87	75	162
18	21	5	松	40	12	第五等	井伊直安	80	80	160
18	25	1	不明	41	3	第一等	本莊宗義	80	80	160
20	22	2	細流	40	6	第二等	阿部正桓	75	80	155
20	22	5	花	40	6	第二等	細川利文	95	60	155
22	24	13	山路	40	12	第五等	本莊宗義	85	70	155
22	25	2	不明	41	3	第三等	井伊直安	70	85	155
22	25	8	不明	41	3	第三等	松平乗長	83	70	153
25	25	9	細流	41	3	第三等	浅野養長	80	70	150
26	22	13	車	40	6	第三等	井伊直安	75	70	145
27	21	14	花	40	6	第三等	大村徳敏	85	60	145
27	22	6	車	40	3	第三等	浅野養長	65	80	145
27	22	13	車	40	3	第三等	井伊直方	85	60	145
31	23	2	野菜	40	9	第二等	阿部正桓	75	65	140
31	25	10	不明	41	3	第五等	松平直之	80	60	140
33	21	15	車	40	3	第五等	徳川達道	78	60	138
33	25	11	野菜	40	3	第六等	松平直之	88	50	138
35	23	7	花	40	9	第三等	浅野養長	55	80	135
36	22	3	不明	41	3	第四等	井伊直方	70	55	125
37	22	8	花	40	6	第五等	徳川昭武	70	40	110
38	25	3	不明	41	3	第三等	阿部正桓	53	108	108
39	25	4	不明	41	3	第四等	浅野養長	56	106	106
40	25	5	不明	41	3	第五等	徳川達道	58	98	98

表6 印画評合計点順リスト

であるが、小川はさらに撮影、現像、焼き付けの各プロセスの技術的側面にまでふみ込んで実践的な助言をしている。黒田は樹幹が半分しか写っていない点を「大二

画趣ヲ失フ」としているが、採点では二点しか減点していない。

B 両者の合計が最低点の例 九二頁25—5 徳川達道撮影

画題年代は四十一年一月であるが画題はそれを印刷した頁が失われているので不明である。⁽¹⁶⁾黒田は「位置并二人物ノ動作完全」とするものの「唯ダ少シノ趣味ナシ」と手厳しい評価を下している。労働中は室内が散らかっている点にこそ面白みがあるのに、整理されている点を批判した。一方、小川は「原板ノ濃淡」や「写度」は申し分ないとしつつも、「位置」についての点で欠点を指摘する。人物を横向きとし、屏風の脇に人物を配して二人が会話する様子を演出すれば良くなると助言している。黒田の採点は五十八点で、減点分は「趣味」に欠けるという点にある。先ほどの作品では「画趣」に欠けるとして二点しか減点しなかったが、「少シモ趣味ナシ」となると大幅な減点をしていることが判る。黒田の採点基準の中で「趣味」が占める割合は大きかったのではないかと予想される。小川は六十点減点の四十点である。「位置」についての欠点を重視したのだろう。今回も小川は写真の技術的分析と共に画面の組み立て方に具体的なアドバイスをを行っている。この姿勢は他の印画評にも共通する。

C—1 両者の採点が大きく異なる例 七五頁21—4 徳川達道撮影

四十年一月の画題「松」で四等人選作である。黒田は六十八点、小川は九十五点である。表5から全体的に黒田の方が高い点数をつけているが、ここでは小川が高く、最高点をつけた。黒田は全体の「色合」は冬の感じを良く表しているが「松樹并二畔道一直線ナル所面白カラズ」としている。位置という単語は用いていないが、表5に当てはめると「位置」に欠点があり、三十二点の減点をしたことになる。一方小川は黒田と同様の欠点を指摘するものの「松ノ影最モコノ画ノ趣味ヲ与へ」ている点を高く評価し、濃淡も申し分なしとしている。指摘した欠点による減点は五点に止まったことになる。「趣味」や「面白」味は他の印画評でもよく言及されるが、この両者の採点に占める比率は高い。

C—2 両者の採点が大きくずれた例 八〇頁22—5 細川利文撮影

四十年五月の画題「花」で二等入選作品。黒田が小川より三十五点高い点をつけている。黒田は、薔薇の背景に贅沢な建物を入れたこと、自然の一部を切り取り、庭の意まで表現したところを「面白シ」として九十五点を与える。面白味を与えている原因は「位置」の巧みさになるだろう。一方、小川は「光線ノ取方」は「面白」としつつも、黒田が評価した背景の建物の踏石が主題である「花」の存在感を減じているとした。「光線」は良いが「位置」がだめだということだろう。特に位置に関しては両者は正反対の評価をしている。これが点差が開いた要因だろう。

D 両者同点数の例 七七頁21—11 松平乗長撮影

四十年三月の画題「車」の一等。黒田は位置、趣味ともに申し分ないとし、「恰モ拵過キタルガ如キ感アリ」とする。小川は人物の服が黒いので車（この場合は踏車）と区別が付かないと欠点を指摘し、その解決作を述べるが、両者共に九十点としている。松平乗長は表1から投稿数が最も多く、全期間に渡って活発に活動をしている。彼は東京美術学校で日本画を学び、明治三十一年の卒業制作「王昭君嫁胡」は東京藝術大学美術館に所蔵されている。⁽¹⁷⁾絵画の基本事項の修得という点ではアマチュアの域を超えていた。他の作品でも安定した構図の作品を残している。また、表4にある通り、華光会とは別に黒田と交流を持ち、彼が主催したと考えられる「日本写真交會」へ黒田を評者として招いている。

E 全体を通じての最高点の例 七五頁21—6 井伊直方撮影

四十年二月の画題「池沼」で一等となった作品。小川は欠席しているが、黒田は百点をつけている。彼は題意に適合し、位置も宜しきを得ているとし、水面と空は同色ではあるが、自ずから境界を識別できると評価している。ついには「強テ非難ヲ云ヘバ余リ能ク出来過ギタルノ嫌アリ」とまで述べている。

華光会例会での採点、印画評は写真に興味として楽しむアマチュアに対するものである。当時の支配階層である華族の同人に対して黒田、小川共に長所、短所を率直に指摘し、時に手厳しい言葉を浴びせる。百点満点で四十点という辛い採点をす

ることもしばしばであった。その背景には、技量向上のためメンバーがそれを望んだということもあるだろう。印画評が掲載されるようになった時期の『華影』は競い合い、技量の向上をはかる場になっていた。百点は、アマチュア写真家の課題に対する採点結果ではあるが、押さえて置くべき基本について、言うべき事はないという意味になる。作品は水平方向にどこまでも広がる視点をとり、画面右下から左手方向にのびる岸辺の水草が中景である舟へと視線を導き、その奥に左から右へと延びる樹林に当たると。樹林は視線を右から左へと転じさせ、遠景へと導く役割を持つ。画面半分を占める水や水草、杭などは、湿気を帯びた空間を感じさせる。「水と天部」の境界が判るという階調もその感を助けているだろう。ただし、黒田が見ているのは例会での印画紙そのもので、『華影』に掲載されたコロタイプ印刷による図版しか見られない現状では、彼が見た階調を誌面からの確に読みとるのは難しい感がある。小川ならば「濃淡」に乏しいという評価を与えたかもしれない。いずれにせよ、この作品は彼が考える絵画の基本（学習課程におけるという前提付きではあるが）を満たした作品と言えよう。

ここまでは、個別の作品について、印画評を読み、彼らの着眼点、判断基準の一端に触れてきた。その他の印画評全体を通覧してみたい。評価の着眼点で小川にあって黒田にほとんど見られないのは、写真の技術面に対する言及である。特に、「写度」に関しては小川が全体の約三分の一で言及しているのに対して黒田は全く言及しない。これは黒田が洋画家であるので当然のことであるが、小川が同人達に与えている技術的アドバイスは高度で実践的である。技術面を除くと、画面の分析手法は写真を絵画と見なしての評価になっている。しかし、前記C―2で見たように、両者の評価が正反対になるものもあった。黒田は「位置」という言葉を最も多く使っているが、写真を総体として評価する時に用いている言葉は「面白味」や「趣味」である。この両者の評価が低い時には点数は大きく減じられている。一方、小川は、画面の評価の基本は黒田と共通するが、写真の専門家として技術的分析を行い、改善方法を具体的に示す点に特色がある。これは「位置」や「図様」などの画面の組み立て方についても同様である。アドバイスはそのまま実践できるほどの具体性を持っている。

さて、同人達が工夫を凝らしながら、評者が全く言及しない要素に言及しておきたい。それは印画面の質感表現に関わることである。一例として二三頁23―1、四十年七月画題「野菜」で一等となった徳川達道の写真を見ると、通常の印画よりも画面の粒子のばらつきが目立ち、もやとした感じになっている。同様の効果を意図したと考えられる作品は二十四、二十五号などにも見られる。我々が見ているのは印刷による画面で、稠密なデテールは失われているものの、通常の焼き付けとは異なる質感がある。技法までは正確に特定できないが、何らかの工夫をしていることが想像される。また、九一頁24―13、四十年十二月画題「山路」の五等入選作品では画面に上下方向の凹凸が見られる。華光会同人の徳川昭武旧蔵の写真中に、同じ様な凹凸がある印画紙を用いた写真があるので、こちらも同様の印画紙を用いたと思われる。同人達は印画法や印画紙に一定の手間暇をかけ、それまでとは異なる印画面を工夫していたのである。

印画の濃淡を原板の露出時間や現像の状態にまで遡り解析する小川や質感の相違を確実に識別できたはずの黒田がこれらの変化にまったく言及していないのは不審である。これらの質感の差は特段言及するに値しないものとして無視したのだろうか。

印画評は二十一号から二十五号まで掲載されるが、二十五号では一月の画題までである。二月、三月は合併という形をとり、点数のみである。印画評を通読すると、回を重ねる毎にどうしても類似の批評が増える印象がある。例会で批評が行われた可能性はあるが、印刷は省略されたのかもしれない。また、号を重ねる毎に投稿メンバーは特定の人物に集約される傾向がうかがわれ、会全体としての活動が下火になっていく様相も垣間見える。厳しい批評を甘受し、印画評と採点を掲載したのは技量の向上のためだろう。活動目的の明確化は、参加者同人の減少を招いた。投稿しなかった同人達に多様な写真観があったであろうことにも留意しておきたい。

六、黒田清輝と小川一真の講演

ここでは、別の資料から黒田と小川の写真観を探り、それと『華影』掲載の印画評との比較を試みたい。

黒田清輝の写真観を採る上で重要な講演が明治四四年九月十九日、東京美術学校写真部校舎階上講堂で行われた。「画家の見たる写真に就いて」である。「万国写真展覧会」の開催を機に、「全国写真大会」が全国の写真業者、写真家、関係者によって開催された。同大会の発起人総代は中島精一で小川一真も開催に尽力した。彼らの他、丸木利陽、下岡蓮枝など当時最高の写真家や浅沼商会、小西商店などの写真業者が会場で聴講した。これまで見てきた黒田の印画評はアマチュア写真家に対する指導が前提となっていたが、この講演は文字通り当時最高の専門家を対象としていた。講演の筆録は明治四四年十月一日発行の『写真新報』に掲載された。筆録者は『写真新報』編集部員である。

冒頭、自分は写真の専門家ではないと断りつつも「日本で行はれて居る或る写真の如きは甚だ不快に感じて居る、写真は面白くない」と痛烈な言葉を放つ。「写真が不快に感ずることは唯だ写生的であるからである」とその理由を明かす。「絵画が美術品なれば写真は工芸のやうな感がする」とも述べている。しかし、彼の真意は写真を批判することではなかった。「左様でなくしたい、写真もよく応用したなら必ず美術品になるに相違ない」と続け、そういう作品を「今後作つて貰ひたい、目下の処では自分は美術と感じない、これを美術となす方法と手腕とは諸君に待たねばならぬのです」と辛口のエールを送った。黒田は写真を美術品とは認めず、一段格下の「工芸品のやうな」ものとしたが、美術品となる可能性を認め、そうなつて欲しいと述べている。では、「これを美術となす方法と手腕」とはどのようなものだろうか。

「先づ、絵画の習ひ初めは、人物よりも風景の方が入り易い、写真も左様であらうと思ふ」とし、写真を美術品とするために、絵画の習得方法について語る。絵画に倣えば、写真は美術に成り得るという認識である。風景を習得するには、「前景、中景、後景、を具へること」が必要で、そのためには「あらゆる方面の智識と熟練」が必要と説く。続けて「人物を描くには其人固有の骨格風貌を現はすことが必要であると同時に、其生命、其活気其表情を描き出すことも亦大に必要である」とする。これは風景ではなく、人物について述べられたものではあるが、形似を超えて「其生命、其活動」を描かなければならないという点は、印画評で「趣味」、「面白」味

を重視している点と通底する。また、風景での前景・中景・後景の部分は印画評の「遠近」と同じである。いずれも対象に迫り、固有の特質を表現しなければならないという造形の基本だからである。黒田の写真観は絵画と同じ価値観に基づき、絵画と同様の修練を積めば写真は美術品となりうるというものであった。

講演会の主催者は、黒田の写真観を承知の上で演者に招いたのだろう。美術品の世界における権威である黒田は写真に対する批判者であると同時に理解者、支援者でもあった。写真を一段格上の美術品とし、地位向上を図りたいという主催者側の意向も講演の背景にうかがえる。

これに対して、小川一真は当時の写真が置かれた状況に対して、どのような見解を持っていたのだろうか。これをうかがい知る資料に彼の晩年の講演「日本初期の写真界」がある。⁽¹⁹⁾そこには「なるべく美術的、芸術的の頭脳をもう一層養つて皆さんがおやりになつたならば帝展にも院展にも、日本画あるひは洋画といふやうな具合に、この写真が入ることが出来るであらうと思ひます。」と黒田同様、写真はまだ美術・芸術と認められていないが、かつて黒田に「写真はもう大分進歩したから（中略）文展の中に入れてやつてもよからうと思ふ」と伝えたことを明かす。これに対して黒田は「それはさうです、どうしてもこれは工芸美術として入れることをお互に骨を折らう」と言はれましたが不幸にして黒田君は先に逝かれました」と振り返り「黒田君と私が約束した芸術写真を帝展に入れたい」という願いは、皆が協力すればかなうだろうと述べる。ここで気になるのは黒田が文展に写真を入れる努力をする際に「美術」という言葉を使わず「工芸美術」という単語を用いている点である。努力を重ねたとしても、美術よりはやはり格下という認識があったのかもしれない。ともあれ、黒田と小川は写真の地位向上を図り、美術並の資格を持つ芸術として社会的認知を獲得しようとする同志的繋がりを持っていたのである。

おわりに代えて

『華影』は華族だけが集まる閉じた世界の中で刊行された。公開を前提としないので、率直な彼らの意志が反映された。写真を写すことの素朴な喜びを共有したⅠ期、共通画題を設定して比較を可能にしたⅡ期を経て、優劣を決めるようになった

Ⅲ期、洋画、写真の専門家を招き、技量の向上に切磋琢磨するようになったⅣ期と『華影』には純粋なアマチュア写真家の活動の履歴が残されている。この時期のアマチュアの印画を目にする機会が少ない現状において、五六八 points の印刷画像は貴重な情報源となる。また、Ⅳ期の活動は、洋画家の権威を招き、絵画的価値観、体系のもとで技術向上を図っている、彼らの写真は明らかに絵画を志向している。絵画に範をとる写真をビクトリアリズム写真と呼んでいるが、彼らのⅣ期の活動は、その潮流の一つに数えられるだろう。特に、絵画の権威から直接指導を受け、その内容までも知ることができる点は貴重である。そして、Ⅰ期からⅢ期はそれが明確になるプロセスを示していると読むことも可能である。

小川、黒田の具体的かつ直接的な写真批評、分析は『華影』と出会うことによつて記録され、今日に伝わることになった。営利から最も遠い位置にいる華族写真愛好家はアマチュアの典型の一翼を占める。華族が持つ文化的素養や華麗なる人脈は光と影の造形となつて、ここに投影されているのである。

最後に執筆の機会を与えて下さった東京文化財研究所田中淳企画情報部長、『華影』の調査・図版掲載にご協力を頂きました各所蔵者・機関に御礼を申し上げます。

註

- (1) 岩波書店『広辞苑 第六版』による。また、小学館『日本国語大辞典』オンライン版にも「はなのかげ(陰)」として記載がある。
- (2) 参考Aに記載のⅤ期は後述の暫定番号28の一冊のみであるのでⅣ期の例外処理とすることも可能かと思うが、区分の基本指標である画題の有無が不明であること、印画評、採点を欠いていることからⅣ期に収めるよりは別区分とすることを選択した。
- (3) 静物と人物のそれぞれにスクリーン有と無の場合の写真を載せる。個別に数えれば四枚となるが、二枚一組で効果の有無を示していると解釈して二点と数えた。
- (4) 各号の所蔵者別内訳は「参考B 所蔵者一覧」の通りである。なお、筆者が勤務する松戸市戸定歴史館開館準備段階(平成元〜三年)で、『華影』所在調査を行ったのは森仁史氏(当時松戸市教育委員会学芸員、現金沢美術工芸大学教授)で、17種17冊を確認した。その後筆者が継続調査を行い、現状に至っている。
- (5) 爵位は華族家の当主にのみ与えられるが、その家族は各家の爵位に対応した華族としての礼遇を受ける。

- (6) 同人中、徳川慶喜は水戸徳川家に生まれ、徳川將軍家の一員である一橋(將軍家から独立した大名ではない)に養子に入り、明治三十五年には徳川宗家から分家して新たに公爵を受爵する複雑なプロフィールを持つ。これを踏まえて筆者が適宜編集して記載した。徳川昭武、厚、達道についても同様とした。旧公卿、旧諸侯以外の四名は伊集院兼知、大村徳敏、鳥尾光と清浦保恒である。

- (7) 徳川慶喜は註6で述べた通りだが、昭武は水戸家に生まれ、旧將軍家の一員である清水家を相続し、明治元年に水戸藩主となった。厚は慶喜の四男で明治十五年に徳川宗家からの分家が認められ華族となり、同十七年に男爵となった。達道は一橋家の当主である。

- (8) 内容は参考B「岡部長職出品西洋絵画写真一覧」参照。原作品所在調査は松戸市戸定歴史館研究員小寺瑛広氏による。提供されたデータをもとにまとめた。

- (9) 慶喜と写真については以下の拙稿がある。「將軍のフォトグラフィ―展覧会ノート―」(『將軍のフォトグラフィ―展図録、松戸市戸定歴史館、平成四年)、「幕末の二条城について」(『二条城 黒書院障壁画と幕末の古写真』展図録、松戸市戸定歴史館、平成六年)、齊藤洋一・岩下哲典『將軍・殿様の撮った幕末明治』(新人物往来社、平成七年)、「徳川慶喜とお抱え写真師・中島欽次郎―幕府開成所との関係を巡って」(『日本写真芸術学会誌』(平成七年度第4号第2巻)、「前將軍の眼差し」(『家康と慶喜』展図録、静岡市美術館、平成二十二年)

- (10) 徳川文庫については加藤真保/吉田恵理「静岡市立清水中央図書館「徳川文庫」―その成立と蔵書印に関する調査報告」(『没後一〇〇年 徳川慶喜』展図録所収、松戸市戸定歴史館・静岡市立美術館、平成二十五年十月)参照。

- (11) 参考C及び表1参照。

- (12) 松戸徳川家伝来写真(松戸市戸定歴史館所蔵)中に「上公御自撮」と台紙裏に墨書がある二枚を昭武撮影と考えている。水戸徳川家で「上公」は彼を指していたからである。以後十年程撮影事歴は見られないが、三十六年七月からは本格的に撮影を行うようになる。しかし、この時の画像は不鮮明で構図もこなれていないことから技術習得段階にあったと思われる。

- (13) この記録は四十二年十二月までつけられるが、四十一年二月以降は主に写真の名称と撮影年月までの記載のみとなる。この時期、彼は癌になり、体調が優れなかったためだろう(四十二年七月三日没)。

- (14) いずれも日本カメラ博物館所蔵。『富岳集』の発行年は不明だが、『韓国集』との共通する雰囲気や奥付を欠くことなどから『韓国集』の少し前の発行であることが想像される。

参考 E 表紙 B

参考 F 表紙 C

- (15) この表には入っていないが、黒田単独で九十八点以上をつけた作品が三点あり、欠席した小川の点数を零点と換算してもこの表の最低点以上となる。三点とは七五〜七六頁掲載の番号21―6、7、8である。
- (16) この作品は五等だが、一等から四等の入選作は風景を写しており、室内人物を写すこの作品と共通する画題を想像するのは難しい。
- (17) 絹本着色、一幅、百六十一・七×八十二・一cm、目録番号六四四
- (18) 「河舟」、撮影者不詳（『松戸徳川家所蔵資料目録 第一集』写真 V―2―11、松戸市教育委員会、平成二年）
- (19) 『写真年祭記念講演集』所収（大正十五年、朝日新聞）
- (さいとうよういち 松戸市戸定歴史館学芸員)

参考 G 表紙 D

参考 D 表紙 A

計	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	暫定番号
14						○		○			○			○	○	○			○		○	○	○	○		○	○	○	静岡市清水中央図書館 (徳川慶喜旧蔵本)
13	○			○			○	○			○			○			○	○		○		○		○		○	○		ペンタックスギャラリー旧蔵
3						○															○		○						松戸市戸定歴史館
4					○								○								○							○	個人蔵
14					○	○	○	○		○		○	○				○	○				○		○	○	○	○		個人蔵

参考 C 所蔵者一覧

<p>21-1 画題「松」明治 40 年 1 月 第一等 徳川昭武</p>	<p>黒田印画評 松幹或ハ石面ニ於ケル光線其宜敷キヲ得テ申分 ナク大ニ題意ニ適合セリ（八十九点）</p> <p>小川印画評 松幹ノ逆光線ニ於ケル写度并ニ現象ノ調和適當 ニシテ且ツ題意ニ申分ナシ唯ダ写真ノ位置トシ テハ今少シ図様ヲ小ニセバ最モヨシ遠景ノ天部 写度過ギタル為淡ク折角原板ニ現ハレタルモノ ヲ焼付ニ於テ現出スル事能ハズ斯様ナル原板ハ 其遠景ヲ現出スルコト必要ナリ（九十点）</p>
<p>21-2 画題「松」明治 40 年 1 月 第二等 松平乗長</p>	<p>黒田印画評 困難ナル位置ヲ面白ク撮影セシハ其価値ノ存ス ル所ニシテ先ヅ之ヲ裝飾的図様トスベシ（九十 点）</p> <p>小川印画評 図様ニ於テ人物ノ位置適當ニシテ画ノ如ク申分 ナシ但シ原板ノ淡キガ故ニ松ト岩同色ナリ若シ 此ノ如キ場所ヲ写ス時ハ成ベク光線ノ陰陽ニ注 意セバ大ニ調子ヲ現ハスベシ（八十五点）</p>
<p>21-3 画題「松」明治 40 年 1 月 第三等 松平乗長</p>	<p>黒田印画評 位置悪ク色合一樣ナレトモ題意トシテハ其思考面 白ク趣味アルモノトス（八十五点）</p> <p>小川印画評 遠景ノ雲近景ノ人物其釣合最モ面白シ但シ單純ナ ル一本松近景ト同色ナルハ悪ルシ今少シ写度ヲ過 ゴセシナラバ松樹ノ濃淡ヲ現ハシ一層ヨロシカル ベシ（八十五点）</p>

<p>21-4 画題「松」明治40年1月 第四等 徳川達道</p>	<p>黒田印画評 松樹并ニ畔道一直線ナル所面白カラズ但シ全体ノ色合ニ於テハ大二冬天ノ感ヲ現ハセリ(六十八点)</p> <p>小川印画評 松ノ影最モコノ画ノ趣味ヲ与ヘ其濃淡モ亦申分ナシ但シ畔道ノ直線ニ見ユル所悪ルク若シ人物ヲ或場所ニ置キシナラバ一層面白カルベシ(九十五点)</p>
<p>21-5 画題「松」明治40年1月 第五等 井伊直安</p>	<p>黒田印画評 題意トシテハ適當ナレトモ全体一色ニ過ギタリ今少シ色合ニ於テ變化ヲ望ミタシ(八十点)</p> <p>小川印画評 題意トシテハ面白キモ原板ノ濃淡少キガ故ニ画ニ於テ黑白ナシコノ画原板ノ写度過ギタル為メ濃淡ヲ失ヒ且ツ焼付ニ於テモ過度ノ如ク思ハル(八十点)</p>
<p>21-6 画題「池沼」明治40年2月 第一等 井伊直方</p>	<p>黒田印画評 題意ニ適合シ位置モ亦其宜シキヲ得タリ水ト天部同色ナレドモ自ラ分界ヲ見ルヲ得タリ強テ非難ヲ云ヘバ余リ能ク出来過ギタルノ嫌アリ(百点)</p> <p>小川印画評 (欠席)</p>

<p>21-7 画題「池沼」明治 40 年 2 月 第二等 徳川達道</p>	<p>黒田印画評 画トシテノ配置宜シク備ハレリ且ツ樹木ボケタル様子宜シク唯ダ濃淡遠近ノ差少ナク余リニ濃度即チ黒キニ過グルガ如シ又天空ノ広キニ過グル割合ニ趣味ナク若シ雲ニテモアラバ一層宜シカルベシ（九十九点）</p> <p>小川印画評 （欠席）</p>
<p>21-8 画題「池沼」明治 40 年 2 月 第三等 徳川昭武</p>	<p>黒田印画評 位置完全ニシテ横広キ所ヲ能ク画中ニ収メタリ唯ダ重ナル位置ヲ占ムル樹木ノ葉等ニ遠近ヲ見ズ恰カモ月影ニ提灯ヲ写セルガ如キ感アリ（九十八点）</p> <p>小川印画評 （欠席）</p>
<p>21-9 画題「池沼」明治 40 年 2 月 第四等 松平乗長</p>	<p>黒田印画評 自然ノ様子ヲ能ク写^{ママ}ヒリ黒キ中ニオ^{ママ}自ラ遠近ノ差ヲ見ルヲ得別ニ非難スベキ所ナキガ如シ画トシテハ光線反射ノ白点及ビ夕景ノ如クニシテ否ラザルガ如キ点面白カラズ（九十七点）</p> <p>小川印画評 （欠席）</p>

<p>21-10 画題「池沼」明治 40 年 2 月 第五等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 池ト云フヨリモ寧ロ魚ノ題ニ適セルガ如シ唯ダ此ノ如キ画ハ好ンデ度々作ル時ハ嫌氣ヲ生スベシ此ノ印画ニ於テ前方（手前）ニ水面ヲ示スモノアレバ猶宜シカルベシ水面判然セサル故魚水中ニ居ルヤ否ヤヲ明ニ識別シ難キガ如シ（九十五点）</p> <p>小川印画評 （欠席）</p>
<p>21-11 画題「車」明治 40 年 3 月 第一等 松平乗長</p>	<p>黒田印画評 位置ヨク趣味充分ニシテ恰モ拵過キタルガ如キ感アリ（九十点）</p> <p>小川印画評 位置ニ於テハ宜敷シ但シ光線ノ弱キ為メ遠景并ニ人物一色トナリ且ツ人物ノ衣服黒キガ故ニ車ト區別ツカズ唯ダ水ノ影ニ於テハ至テ趣味ヲ有セリ此ノ如キ画ハ写度ヲシテ今少シ過ゴセシナラバ遠景ノ部分淡色トナルベシ天部ノ如キハ多少ノ雲アリシナラバ一層申分ナシ（九十点）</p>
<p>21-12 画題「車」明治 40 年 3 月 第二等 細川利文</p>	<p>黒田印画評 荷車及ビ策ノ配置宜敷ヲ得テ自然ノ情アリ唯ダ光線少キ為メ地面判然セズ且ツ全体ニ暗過ギタリ（九十八点）</p> <p>小川印画評 光線弱キ為メ地面暗シ但シ全体ノ調子ニ於テ申分ナシ此ノ如キ暗キ場所ヲ写スニ絞リノ大ナルヲ用半シナラバ光線ノ不足ヲ補フガ故ニ荷車ト竹藪ノ濃淡ヲ區別シテ明ルキ画トナリ從テ人物ノ白キ衣服或ハ笠ニ於テ写真ノ浮出シヲ助ケテ最モヨロシキ図トナルベシ（八十五点）</p>

<p>21-13 画題「車」明治40年3月 第三等 井伊直安</p>	<p>黒田印画評 前景中景ニ於テ色ノ変化乏シク從テ書割図ノ如シ位置ニ於テハ余リニ濃淡半分ヅ、ニテ面白カラズ（七十五点）</p> <p>小川印画評 水車ノ光線誠ニ宜敷ク写度適當ナレドモ近景ノ光線余リニ正當ナルガ為メ画ノ力ヲ失ヘリ且ツ位置ノ撰定遠景半分近景半分トセシハ面白カラズ此ノ如キ場合ニハ遠景三分近景七分ニスルヲ法トス（七十点）</p>
<p>21-14 画題「車」明治40年3月 第四等 大村徳敏</p>	<p>黒田印画評 背景並ニ車ノ位置宜敷モ首眼タル馬並ニ車力ノ居ラザルハ大ニ主客ヲ転倒セルモノトス（八十五点）</p> <p>小川印画評 道路ノ方向配景等誠ニヨロシ唯ダ目的物タル車馬人物等焦点ヲ合セ背面及ビ樹木ノ焦点ヲ外セシナラバ一層宜敷カルベシ（六十点）</p>
<p>21-15 画題「車」明治40年3月 第五等 徳川達道</p>	<p>黒田印画評 位置配色共ニヨロシ唯ダ車トシテ余リニ趣味ナク從テ画ノ雅致ヲ欠ケリ（七十八点）</p> <p>小川印画評 逆光線ハ撮影上困難ナレトモ影ヨク鮮明ニ現出セリ但シコノ図趣味トシテハ余リ面白カラズ（六十点）</p>

<p>22-1 画題「細流」明治 40 年 4 月 第一等 徳川 厚</p>	<p>黒田印画評 細流ノ位置能ク画面ニ適応シ且ツ態トラシキ処ナシ全体ニ淡暗ク見ユルモ却テ水ノ光ル処ヤ家根ノ光線ヲ強ク示シ冬ノ淋シキ景色ヲ助クルカノ如ク趣味ニ富メリ（九十点）</p> <p>小川印画評 印画ノ出来宜シク位置ノ選定最モ可ナリ河ノ屈曲セル処樹木ノ近景等完全ナリ（九十点）</p>
<p>22-2 画題「細流」明治 40 年 4 月 第二等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 山中溪流ノ趣充分現ハレルトモ印画紙ノ為ニヤ濃淡判然セズ從テ山或ハ樹木ノ奥深キ処見ヘ難シ杉ノ如キ殆ンド一色ノ様ニ見ユナリ（七十五点）</p> <p>小川印画評 写度適當ナレトモ印画ニ於テハ少シク淡キニ過グ細流ト樹木ノ釣合余リ中心ニシテ見惡シ故ニ今少シク向テ右方ヲ余分ニ写シ左方ヲ少クセバ河ノ中心横ニ偏シ全体ノ釣合宜シカルベシ（八十点）</p>
<p>22-3 画題「細流」明治 40 年 4 月 第三等 浅野養長</p>	<p>黒田印画評 位置モ宜シク殊ニ流ノ屈曲スル処アル為メ並行線ヲ切り趣味ヲ助ク然レトモ木ノ枝ヲ見ルニ日光ノ当リタル景色ノ如ク思ヘトモ地面ニ其感ナシサリトテ又曇天ノ淋シキ感ヲ与ヘルモノニモ非ズ故ニ感覚上如何ニ考ヘテ宜シキカ景色ニ対スル感覚ヲ現ハスニ乏シキモノト云フベシ（八十点）</p> <p>小川印画評 種板印画ノ出来最モ宜シ此ノ位置ハ淡泊ナル景色ニ近景ノ樹木ヲ添ヘ又河ノ曲線ナル為一層趣味ヲ与ヘリ唯ダ欠点ニ於テハ遠景ノ山余リニ樹木淋シキ感アリ若シ河向ノ畔道ニ農夫ノ如キ人物ノ歩行セル処ノ姿勢ヲ置カバ最モ面白カルベシ（七十点）</p>

<p>22-4 画題「花」明治 40 年 5 月 第一等 徳川達道</p>	<p>黒田印画評 軽キ趣味ヲ与ヘ文字ニテ云ヘバ俳句ノ如キモノニシテ小サク現ハシタル処ニ面白味ト自然ヲ現ハセリ唯ダ日光ノ力今少シ或処ニ強ク映ジタラシニハ一層完全スベシ(九十点)</p> <p>小川印画評 写真ノ印画ハ少シク平ナレトモ花ノ位置選定ニ於テハ完全ナリ中央ノ花高く左右ノ花ノ配合最モヨシ若シ印画ニ今少シク濃淡アレバ一層浮出シ見栄ヘアルベシ(九十点)</p>
<p>22-5 画題「花」明治 40 年 5 月 第二等 細川利文</p>	<p>黒田印画評 薔薇ヲ写シタル位置トシテ殊ニ或贅澤ナル建築物ノ一部ヲ示シタル処面白シ且ツ自然一部分ヲ取り庭ノ意ヲ示シタルハヨキ選ミ方ナリ(九十五点)</p> <p>小川印画評 光線ノ取方面白ク日向ト影トヲ現ハシタル点妙ナリ印画ノ出来モ宜ロシ唯ダ欠点トスル処ハ全面ノ踏石花ノ背部ニアル為メ眼目タル花ノ障害物トナレリ(六十点)</p>
<p>22-6 画題「花」明治 40 年 5 月 第三等 浅野養長</p>	<p>黒田印画評 印画紙ノ為力写真ノ為力余リ一色ニ見ヘ中景ヨリ遠景ノ樹木一様ノ色ヲナシ濃淡ニ乏シク光線モ何レヨリ来ルカ又景色ヲ写シタル時刻ノ説明モ朝ナルカタ景ナルカ晴力雨力誠ニ不明ナリ(六十五点)</p> <p>小川印画評 花ト池樹木ノ位置最モ可ナリ但シ写度ノ過タル為余リ濃淡ニ乏シ(八十点)</p>

<p>22-7 画題「花」明治 40 年 5 月 第四等 井伊直方</p>	<p>黒田印画評 光線ノ取方ニ於テ最モ趣味ヲ助ク然シ躑躅ヲ写シタル事ニ就テハ少ク物足ラヌ感アリ余リ一部分ニ過キタル故何力之ニ他ニ主眼アリテ之ヲ附属ノ背景又ハ添ヘ物トセシナラバ最モ面白カルベシ然シ光線ノ取方ハ完全ニシテ附属ノモノニ非ズ且ツ地ニ映ジタル日光ノ力ハ充分ニ現ハレ居ルナリ（七十五点）</p> <p>小川印画評 写真トシテハ至極上出来ニシテ光線ノ道ニ映ジタル処面白シ然シ少ク物足ラヌ心地ス斯ノ如キ図ニハ何力右方ニ添ヘ物ヲ置カバ最モ宜シカルベシ（五十点）</p>
<p>22-8 画題「花」明治 40 年 5 月 第五等 徳川昭武</p>	<p>黒田印画評 藤花ヲ主トシタルモノナレドモ図柄ヨリ云ヘバ附属ノ様ナリ前面ニ建築物アル故人物若カモ婦人ノ美装セルモノアリテ始メテ完全スベシ花ニ就テノミ見レバ柱ノ如キハ障害物トナルカモ知レズ若シ藤花ヲ主トシテ写サントセバ今少シ花ニ光線ノ濃淡ヲ強ク現ハシ一色ノ単調ヲ避ケタキモノナリ（七十点）</p> <p>小川印画評 写真ノ出来普通ナレドモ手摺ノ柱目障リニシテ眼目タル藤ノ中心ヲ塞ギ為メニ藤ナル目的ヲ欠ケリ斯ノ如キ図ニハ能ク障害物ニ注意シ暗箱ノ位置ヲ少シク変ジテ柱ヲ隠スベシ（四十点）</p>
<p>22-9 画題「夜景」明治 40 年 6 月 第一等 徳川達道</p>	<p>（欠席）</p> <p>黒田印画評 小川印画評 位置ノ撰定并ニ天部ノ割合宜ク其距離ニ於テモ全景トシテ適當ナル場所ヲ得タリ但シ斯様ナル図ニ於テハ右方ヲ多ク左方ヲ少クスルヲ普通トス曝度ノ如キモ誠ニ適當ナリ若シ其度ヲシテ過ゴセシナラバ電氣ノ映ゼシ場所迄明ニ写サレ反テイルミネーションノ写真トシテ不完全トナルベシ（九十五点）</p>

<p>22-10 画題「夜景」明治 40 年 6 月 第二等 井伊直方</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 近景ノ草木中景ノ森林人家ノ燈光水ニ映ジタル 所画趣アル夜景トシテ写サレタルモノト思ハル 併シナガラ今一ツ或ハ二ツ程燈光水ニ映ゼシナ ラバ一層趣味アルベシ印画現象ニ於テモ皆適當 ト思ハル(九十点)</p>
<p>22-11 画題「夜景」明治 40 年 6 月 第三等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 印画普通ニシテ室内ノ燈光障子ニ映ジタル為夜 景写真トシテ見ルベキモノナレドモ天空ノ白キ 為メタ刻光線ノ少ナキ時ニ写度不足ノモノヲ作 リタルガ如シ正面ノ樹木ト地面ノ濃淡一色ニシ テ夜景トシテ區別ナシ人物ニ提灯ヲ持タセ或ハ 篝火ニテモ焚キシナラバ座敷ノ光線ト相對シテ 趣味ヲ得ベシ(七十点)</p>
<p>22-12 画題「夜景」明治 40 年 6 月 第四等 松平直方</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 花火ノ印画トシテ写度適當ナレドモ位置ニ於テ天 部少ナシ花火撮影ヲナス事ハ欧米ニテモ一ツノ專 門トナリ電光撮影ト同様ノ関係ヲ以テ最モ曝度ニ 注意セネバナラヌ何トナレバ花火ヲ肉眼ニテ見ル 時ハ光線ノ動揺ヲ見認ムレトモ撮影ノ写度ノ過キ タル場合ニハ其動揺スル所ヲ写ス能ハズ為ニ速力 ヲ早メタルシヤッターヲ用ユベキ事ナレドモ絞り ヲ大ニスル必要アリ(絞小ナレバ写度不足トナル ベシ)コノ写真ニ於テ写度適當ナル所ハ薄ノ如キ 部分申分ナキモ火ノ一面ニ限ノナキ所欠点ナレド モ之レ已ムヲ得ザルモノナリ故ニ成ルベク曝度ヲ 減ジタル時ハ限取幾分力現出スルモノナリ(六十 五点)</p>

<p>22-13 画題「夜景」明治 40 年 6 月 第五等 松平乗長</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 位置ノ取方天地ノ割合適当ニシテ一部分ノイルミネーションヲ写シタル画ナリ写度適當ナル為ニ能クイルミネーションノ電球ヲ写シタル所注意シタルモノト認ム水ニ映ジタル光線ハ一見池畔ニアルト云フ事ヲ示スニ妙ナレドモ惜ムラクハ全景ニ非ズシテ一部分ノ撮影トセシガ欠点ナリ(六十点)</p>
<p>23-1 画題「野菜」明治 40 年 7 月 第一等 徳川達道</p>	<p>黒田印画評 野菜トシテハ図様無難ニシテ比較的故トラシキ所ナク色合モ亦余リ黒カラズ但シ明ルキ所ニ於テ今少シ光線ノ強キヲ望ミタシ(九十五点)</p> <p>小川印画評 野菜ノ位置最モ自然ニシテ配合モヨシ唯ダ写度ノ少シク過ギタル為メ光線ノ強ク当リシ部分乏シクス様ナル青キ野菜ヲ写ストキハ黄色光線ヲ用ユベシ(黄色ナル裂地ノ衝立ヲ作り写ストキハ影ノ部分ニ於テ精密ヲ現ハス)然ルトキハ光線ノ強キ部分ハ大ニ白色トナル但シ写度ハ普通ヨリ約二倍程ヲ要スルヲ常トス(九十点)</p>
<p>23-2 画題「野菜」明治 40 年 7 月 第二等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 位置光線ノ濃淡其宜敷ヲ得タルモ図様面白カラズ(七十五点)</p> <p>小川印画評 野菜図トシテ少シク趣味単純ナレトモ意匠トシテ面白ク印画ノ濃淡モヨシ但シ其欠点ニ於テハ此ノ人物ノ衣服并ニバック黒キ為メ浮出サズ此ノ如キ写真ヲ写スニハ白キ障子ノ方面ニ人物ヲ置キシナラバ衣服ノ黒色判然トナリ其人物ヲシテ最モヨク浮出サシムベシ猶家内ヨリ下女一人此ノ人物ニ相對シテ談話ヲナシツゝアル図トセバ最モ趣味アレトモ唯ダ物足ラヌ感アリ(六十五点)</p>

<p>23-3 画題「野菜」明治 40 年 7 月 第三等 浅野養長</p>	<p>黒田印画評 人物余リニ中央ニアリテ且ツ局面モ広キニ過ギ タリ殊ニ光線ノ濃淡遠近ニ乏ク凡テ同色ニ見ヘ テ面白カラズ若シ人物ヲシテ左右何レカニヨラ シメ野菜ノ部分ヲ一個所ニ寄セシナラバ其感ヲ シテ深クセシナラン但シ此ノ図ハ野菜ニ非ズシ テ寧ロ労働ト云フ題意ニ近カルベシ(五十五点)</p> <p>小川印画評 写度不足ナルガ故ニ原板ノ濃淡悪ク為ニ光線ノ 当リタル部分モ平ニナリ写真ノ印画濃淡從テ浮 出サズ図ニ於テハ人物ノ姿勢及野菜ノ部分至テ 面白クキ(三) 図ハ向テ左方約一寸程切レハ画 ノ位置宜敷カルベシ猶景色ノ広キ為メ目的タル 野菜ニ対シテ大ニ障害ヲ与ヘシ感アリ(八十点)</p>
<p>23-4 画題「放題」明治 40 年 8 月 第一等 松平乗長</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 図様ノ撰定道路ノ屈曲シタル近中両景ニ於ケル 荷車ノ釣合逆光線ノ為メ車ト道トニ大ニ画趣味 ヲ現ハセリ印画ノ濃淡天部ノ雲等モ完全ナリ(九 十点)</p>
<p>23-5 画題「放題」明治 40 年 8 月 第二等 井伊直方</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 雲ヨリ映ジタル光線及田舎家ノ陰影一見夜景ノ如ク 位置図様最モヨシ向テ右方ニ小舟ヲ置キシナラバ此 ノ上ナキ図柄トナルベシ(八十点)</p>

<p>23-6 画題「放題」明治 40 年 8 月 第四等 徳川昭武</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 天部ノ雲ト帆掛トノ遠景ノ屈曲シタル景面白シ其欠点ハ近景多過キタル感アリ又印画全体ニ於テ濃淡少ナシ依テ今少シク曝度ヲ減ズル時ハ一層濃淡ヲ区別スルコトヲ得ベシ(七十点)</p>
<p>23-7 画題「影」明治 40 年 9 月 第一等 徳川達道</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 図様ノ撰定最モ面白ク障子外ニ於ケル小児ノ手影机ニ向ヒタル人物ト対照セバ逆日ニ於ケル机上ノ書物水入火鉢ノ取手ニ光線ノ当リタル部分或ハ障子ノ骨屈曲セサルガ如キ影ト云ヒ写真トシテ申分ナシ唯ダ小児障子ト離レタル為メ頭部ヨリ胴ニ至ル部分少シク明カナラザルハ遺憾ナリ但シ写度并ニ印画ノ濃淡適當ナル最モヨロシキモノナリ(九十点)</p>
<p>23-8 画題「影」明治 40 年 9 月 第二等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 図様ノ完全ニシテ位置富士ト舟ノ釣合最モヨシ写度過キタル為濃淡少ナクヲ二画^マノ浮上リ方悪シキナリ依テ今少シ写度ヲ減セシナラバ一層濃淡浮出為助ケシナラン向テ左方ノ近景ヲ少クシ右方ヲ今少シ加フル時ハ舟ト富士中央トナリ最モ好図ナルベシ(八十点)</p>

<p>23-9 画題「影」明治 40 年 9 月 第三等 徳川昭武</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 釣人ノ位置舟或ハ土坡トノ対照釣合ナド全体ニ於テ申分ナク殊ニ焦点ヲハヅシタル為メ趣味深ケレトモ濃淡一様ニシテ天部ト水トノ界明ナラズ且ツ釣竿ノ途中ニテ切レタルハ遺憾ナリ(七十五点)</p>
<p>23-10 画題「影」明治 40 年 9 月 第四等 松平乗長</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 図様ノ見立面白ク松ト家トノ釣合画ノ如キ趣味アリ唯ダ濃淡少キ為メ浮出シ方悪シク向テ右方ノ堤防ノ中央ニ人物ヲ置キタシ(七十点)</p>
<p>23-11 画題「影」明治 40 年 9 月 第五等 本荘宗義</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 図様ノ撰定面白キ位置ニ於テ橋并ニ人物中景遠景ノ釣合或ハ影ノ映シタル部分ナド趣味甚ダ深シ但シ欠点ハ人物ノ頭部ト中景ノ濃淡一色トナリ又影ニ於テハ形現ハレタレトモ此ノ如キ場合ニハ手拭ヲ人物ノ頭ニ載セシナラバ中景トノ釣合一層面白カルベシ(六十五点)</p>

<p>24-1 画題「漁村」明治 40 年 10 月 第一等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 天空ノ雲遠景ノ樹影申分ナキ出来ナレドモ水ノ部分ニ於テ中程ニ舟ヲ漕ギタル形アリシナラバ上乘ナルベシ但シ原板ノ濃淡ハ大ニ適當ナリ(九十点)</p>
<p>24-2 画題「漁村」明治 40 年 10 月 第二等 浅野養長</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 近景ニ於ケル人物ノ姿勢自然ニシテ目的タル舟ノ形ト相對セリ中景ノ山容モ位置適當ナリ但シ天部余リニ白キ為メ少シク全体ノ画ニ淋シキ感ヲ与ヘタリ(八十五点)</p>
<p>24-3 画題「漁村」明治 40 年 10 月 第三等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 漁夫ノ仕事ヲナセル図様ニ於テ後ロノ舟或ハ家ノ釣合面白ク光線ノ正面ヨリ受ケタル為影少ナク且ツ天部白キ為ニ濃淡強シ此ノ如キ図ヲ写ス時ハ必ズ片光線ヲ用ユベキナリ(八十点)</p>

<p>24-4 画題「漁村」明治 40 年 10 月 第四等 浅野養長</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 漁夫ノ仕事ヲナシ居ル姿勢ニ於テ二人ノ漁夫ノ対話セル形至テ面白キ図ナレドモ写度過ギタル為メ印画ノ全面淡シ此ノ如キ原板ハ一度鍍金ヲナセバ自然濃淡ヲ増スモノナリ (七十点)</p>
<p>24-5 画題「漁村」明治 40 年 10 月 第五等 堀河護麿</p>	<p>黒田印画評 (欠席)</p> <p>小川印画評 近景ノ岩石舟及ビ松樹ノ釣合位置ニ於テハ充分ナレドモ天部ニ於テ柔カキ雲今少シアリシナラバ一層趣味深カルベシ印画ノ仕上ゲニ於テハ申分ナシ (四十五点)</p>
<p>24-6 画題「煙」明治 40 年 11 月 第一等 徳川達道</p>	<p>黒田印画評 秋ノ夕暮ニ於ケル山中自然ノ趣味ヲ現ハセリ此ノ如キ画題ニ就テハ人物ノ態トラシク配置スルノ傾アルモノナレドモ此ノ図ニ於テハ更ニ其傾向ナク大ニ無邪氣ニシテ前景ニハ大木ヲ取り煙ハ其背後ニ立上レルガ如キ実ニ自然ヲ失ハズシテ巧ナリト云フベシ (九十五点)</p> <p>小川印画評 人物ノ配置樹木ノ釣合煙ノ形ナゾ最モ趣味アリ種板ノ濃淡印画ノ色合モ適當ニシテ欠点ナシ (九十点)</p>

<p>24-7 画題「煙」明治 40 年 11 月 第二等 松平乗長</p>	<p>黒田印画評 図様トシテハ今回ノモノ、中ニテ最モ完全ナリ即チ線ノ配合ノ点ニ於テ巧ナリ然シ巧ニ配置スル事ニ気取ラレ過ギタル傾アリ草搔キヲナセル女労働者主眼トナリ煙ノ如キハ客トナレル感アリ（九十三点）</p> <p>小川印画評 少女ノ姿勢ト籠ノ釣合並ニ背景ニ於ケル樹木面白シ但シ位置少シク上リタルガ如シ下部ヲ五分位切り天部ニ五分許リ増セバ印画ノ形最モ宜シカルベシ猶光線ノ取り方平光線ノ為メ影少キハ最モ忌ムベキ所依テ成ルベク片光線或ハ逆光線ニ撮影スベシ（七十点）</p>
<p>24-8 画題「煙」明治 40 年 11 月 第三等 井伊直方</p>	<p>黒田印画評 全体ノ色合ニ於テ淡キニ過ギタル嫌アレトモコノ淡キガ為メニ反テタ方ノ感アリテ面白シ此図ニ於テ一部分ノ雑草力或ハ麦ヲ刈リテ其屑ヲ焚キ労働ノ日暮ナル感動ヲ起スベキ第二ノモノ即チシツ、アル者第三即チ止メテ帰り来レル者ナド加ラバ趣味一層深カルベシ広茫タル所ニテ焚火ヲナセルハ大ニ此ノ意味ヲ殺ゲルガ如シ（八十五点）</p> <p>小川印画評 人物ト煙ノ位置ニ於テ近景ノ枯草ノ形最モ宜ク又遠景ノ焦点ノ外タル為ニ趣味深シ唯ダ人物ノ後ニアル藁ト人物トノ距離接近ノ為メ少ク人物ノ形ト重リタルヲ見ル此ノ如キ場合ニハ注意シテ人物ト重ナラザル事ヲ要ス種板及印画ノ濃淡充分ナレトモ今少シ濃クセシナラバ一層宜シカルベシ（六十点）</p>
<p>24-9 画題「山路」明治 40 年^{マメ}12月 第一等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 濃淡ノ工合能ク整ヒテ宜シ強イテ難ヲ求ムレバ左方ノ樹木ノ位置ヨケレトモ其半分ヲ現ハセルハ悪ルシ絵画ナドニセバ樹幹ト額縁ト一樣ニ見ユルガ為メ大ニ画趣ヲ失フベシ猶樹幹ノ半面ニ其円味ヲ見ハストモ左程ノ感ナシ斯ル時ハ樹幹ノ全部ヲ現ハス方反テ宜シカルヘシ（九十八点）</p> <p>小川印画評 位置ノ撰定ハ宜シキモ光線ノ取方ニ於テ影少ク濃淡ニ乏シ為ニ画ノ深サヲ失ヘリ又印画ノ焼度不足ニテ白色ナク光線ノ当リタル部分ニ濃淡ナシ此ノ如キ原板ニハ少シク焼度ヲ過ゴシ現像ヲ若クシテ濃淡ヲ補フ事必要ナリ近景左方ノ樹幹ノ余リニ端ニアルガ為メ画トシテ少シク位置ヲ欠ケル気味アリ今少シ樹幹ノ全部ヲ現ハス力又ハ取除ク方ヨロシカルベシ（九十点）</p>

黒田印画評

山路ノ趣向充分ニシテ殊ニ雪後ノ景トシテ能ク現ハレタリ唯ダ印画紙ノ加減カ形ノ遠近ハアレトモ色ニ変化ナク樹木ト雪トノ間余リニ確然トシテ面白カラズ（九十点）

小川印画評

雪ト樹木トノ釣合最モヨロシ山路ノ屈曲シタル為ニ奥深く見ヘ近景ノ樹木ノ位置面白キモ遠景ノ山ト樹木ノ間悪ルシス様ナル場合ニ於テハ絞リヲ大ニシテ目的タル樹木ニ焦点ヲ合セ遠景ヲ不明ニナス時ハ樹木ト山トノ区別立チテ宜敷カルベシ印画ノ色合原板ノ濃淡適當ナリ猶コノ路ニ適當ナル人物ヲ配置セバ一層面白カルベシ（八十五点）

24-10 画題「山路」明治 40 年 12 月
第二等 松平乗長

黒田印画評

山路ノ趣味少ケレトモ樹木ノ配置色ノ濃淡ハヨロシ人物ハ学校帰リト見ユレトモ草ノ中ヲ唯ダ独リ歩スルハ全ク不調和ノ感アリ（八十八点）

小川印画評

位置ノ撰定ニ於テ近景ト遠景トノ樹木ノ釣合最モヨロシ原板ノ濃淡モ亦適當ナリ但シ人物ト樹木平行シテ面白カラズス様ナル場合ニハ人物ヲ近景樹木ノ右ノ光線ノ当リタル場所ニ配置スル時ハ一層画趣ヲ助ク人物ノ配置ホト六ヶ敷モノナク最モ人ノ苦ム所ナリ（八十点）

24-11 画題「山路」明治 40 年 12 月
第三等 阿部正桓

黒田印画評

色トシテ全体面白ク見ユ何ントナレバ此ノ山路ヲ光線ガ漂フ所面白キ感アリ絵画トシテ想像スレバ新派ニ於ケル鮮明ナル色ヲ能ク配置シタルモノト思ハル（八十七点）

小川印画評

図様ノ見立位置ノ七分三分ニ配合シタルハ趣味最モ能ク注意セリ印画ノ焼度不足ノ為メ全体ニ濃淡ヲ失ヒタルハ遺憾ナリス様ナル原板ハ少シク濃淡ヲ強ク印画スル必要アリ道路ノ中央ニ人物ヲ配置セシナラバ一層画面ニ活氣ヲ備ヘシナラン（七十五点）

24-12 画題「山路」明治 40 年 12 月
第四等 浅野養長

<p>24-13 画題「山路」明治 40 年 12 月 第五等 本莊宗義</p>	<p>黒田印画評 色調ト位置ニ於テハ完全ナレトモ山路ノ感ニ乏シク唯ダ山中ニ人物ノ働ケル様ノミ殊ニ上部ノ人物ノ如キハ何ノ意ナルカ殆ンド不要ナリ(八十五点)</p> <p>小川印画評 原板ハ適當ナレトモ光線ノ取方ニ於テ平光線ナルガ為メ影少ナク印画ノ浮出シ方悪シ斯様ナル場合ニハ片光線若クハ逆光線ニテ撮影セバ一層樹木并ニ人物ノ濃淡ヲ助クベシ子供ノ配置悪シク樹木ト人物重リテ面白カラズ此ノ如キ時ハ人物ヲ左方ヨリ樹木方ヘ向ケテ配置セバ其釣合ヨロシカルベシ(七十点)</p>
<p>25-1 画題不明 明治 41 年 1 月 第一等 本莊宗義</p>	<p>黒田印画評 冬ノ山里ノ趣味ヲ現出シ細流ノ位置コノ図ニ於テ活氣ヲ与ヘタリ唯ダ惜ムラクハ光線ノ濃淡乏シキ為メタ方ノ如ク徒ニ暗キ所多シ(八十点)</p> <p>小川印画評 近景ノ水遠景ノ田家樹木ノ配合面白シ唯ダ写度少シク不足ト印画ノ焼付過ギタル為メ濃淡ノ區別明瞭ナラズ此ノ如キ原板ハ一タビ鍍金ヲナシテ濃淡ヲ強クシ印画ヲナス時ハ一層ノ見栄ヲナスベシ(八十点)</p>
<p>25-2 画題不明 明治 41 年 1 月 第二等 井伊直安</p>	<p>黒田印画評 タ方ニ於ケル河辺ノ様子ヲ現ハセリ但シ画トシテハ夕雲余リニ重ク且ツ下方ノ部分今少シ明ルキヲ望ミタシ(七十点)</p> <p>小川印画評 図様ノ配置面白キモ印画ノ焼度過ギタル為メ雲ト水余リニ黒ク從テ目的タル人物并ニ舟明カナラズ此ノ如キ原板ハ印画ノ焼度ヲ淡クセバ全体ニ於テ明瞭トナルベシ猶向テ右方ニ於ケル地平線ノ曲リタルハ少シク遺憾ナリ(八十五点)</p>

<p>25-3 画題不明 明治 41 年 1 月 第三等 阿部正桓</p>	<p>黒田印画評 位置ニ於テハ無難ナレトモ道路ニ於ケル樹木ノ影今少シ明ルキヲ望ミタシ（五十三点）</p> <p>小川印画評 原板并ニ印画ノ濃淡ニ於テ遠景ノ樹木ノ工合近景ノ樹木ニ当リタル光線面白ク申分ナシ又位置ニ於テ道路ノ先ヲ失ヒタルハ遺憾ナリ若シ向テ右方ノ田ノ中央ニ人物ヲ置キシナラバ一層趣味多キ図トナリシナラン（五十五点）</p>
<p>25-4 画題不明 明治 41 年 1 月 第四等 浅野養長</p>	<p>黒田印画評 位置ニ於テ面白キモ空ト地面ト同色ナルハ欠点ナリ殊ニ波打ギワノ所ニ強キ色ヲ望ミタシ（五十六点）</p> <p>小川印画評 原板ノ写度過ギタル為遠景ノ濃淡ヲ失ヘリ図樣ニ於テハ舟ノ配置面白ク猶ニ三人物ヲ舟ト舟トノ間ニ立タシメシナラバ趣味多カルベシ（五十点）</p>
<p>25-5 画題不明 明治 41 年 1 月 第五等 徳川達道</p>	<p>黒田印画評 位置并ニ人物ノ動作完全ナレドモ唯ダ少シモ趣味ナシ何トナレバ此ノ種類ノ労働ハ如何ナル家ニモ行ハル、モ労働ノ意味ヨリ云ヘバ座敷ト釣合ハズ又取散シタル所ニ面白アルモノナルニ此ノ図如何ニモ整然タルハ大ニ趣味ヲ欠ク点ナルベシ（五十八点）</p> <p>小川印画評 原板ノ濃淡写度ノ適度トハ申分ナケレドモ位置ニ於テ今少シ横向キトナシ他ノ一人屏風ノ側ニ立チ針仕事ヲナセル婦人ト話ツ、アル様ニセバ最モ面白カルベシ猶室内ノ部分ヲ多ク人物ヲ小サク写ス方反テヨロシカルベシ（四十点）</p>

		黒田印画評 ナシ（八十七点）	小川印画評 ナシ（九十点）
25-6	画題不明 明治 41 年 2-3 月 第一等 松平乗長		
		黒田印画評 ナシ（九十点）	小川印画評 ナシ（八十点）
25-7	画題不明 明治 41 年 2-3 月 第二等 松平直之		
		黒田印画評 ナシ（八十五点）	小川印画評 ナシ（七十点）
25-8	画題不明 明治 41 年 2-3 月 第三等 松平乗長		

<p>25-9 画題不明 明治 41 年 2・3 月 第四等 松平直之</p>	<p>黒田印画評 ナシ（八十三点） 小川印画評 ナシ（七十点）</p>
<p>25-10 画題不明 明治 41 年 2・3 月 第五等 松平直之</p>	<p>黒田印画評 ナシ（八十点） 小川印画評 ナシ（六十点）</p>
<p>25-11 画題不明 明治 41 年 2・3 月 第六等 松平直之</p>	<p>黒田印画評 ナシ（八十八点） 小川印画評 ナシ（五十点）</p>